

山形県埋蔵文化財調査報告書 第46集

# 境 興 野 遺 跡

山 形 県 教 育 委 員 会

1981

境興野遺跡

発掘調査報告書

1981年3月

## 序

国指定の史跡として、出羽国古代の国府に擬定されている「城輪柵遺跡」、また古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」などをふくむ酒田市東部の水田地帯は、埋蔵文化財の宝庫であります。城輪柵の南に位置する東平田地区も古くから土器類や柱根が出土する地として知られ、国府に関連する遺跡が存在するとの推測もなされてきました。

この度、東平田地区の境興野、北田、関Bの三つの遺跡が、本年度施工予定の県営ほ場整備の事業区域内にふくまれることになったので関係各機関と協議の結果、文化財保護法により事前に緊急発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存をはかることになりました。発掘調査は庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、5月17日より開始して8月29日で三遺跡の調査を予定通り完了いたしました。

調査の結果、平安時代の一般庶民の集落跡があらわれ、東北古代史の研究上、貴重な資料を提供することができました。本報告書は、記録保存の一環としてその成果を述べたものであります。

調査にあたって種々御配慮と御協力をいただいた最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会、地元の関、境興野の部落長をはじめ地元の多くの方々、また現地において御指導、御助言いただいた柏倉亮吉山形大学名誉教授、新野直吉秋田大学教授に、記して深甚の謝意を表する次第であります。

昭和56年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

# 例 言

1. 本書は、山形県教育委員会が昭和55年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う境興野遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和55年5月12日から同年8月27日まで行った。
3. 本書の作成は、川崎利夫・安部 実が担当執筆した。
4. 実測図等の作成は野尻 侃・安部 実が担当し、中村敬三・佐藤正子・水落みち子・石井 節の協力を得た。
5. 編集・写真撮影は安部 実が担当した。

## 調 査 体 制

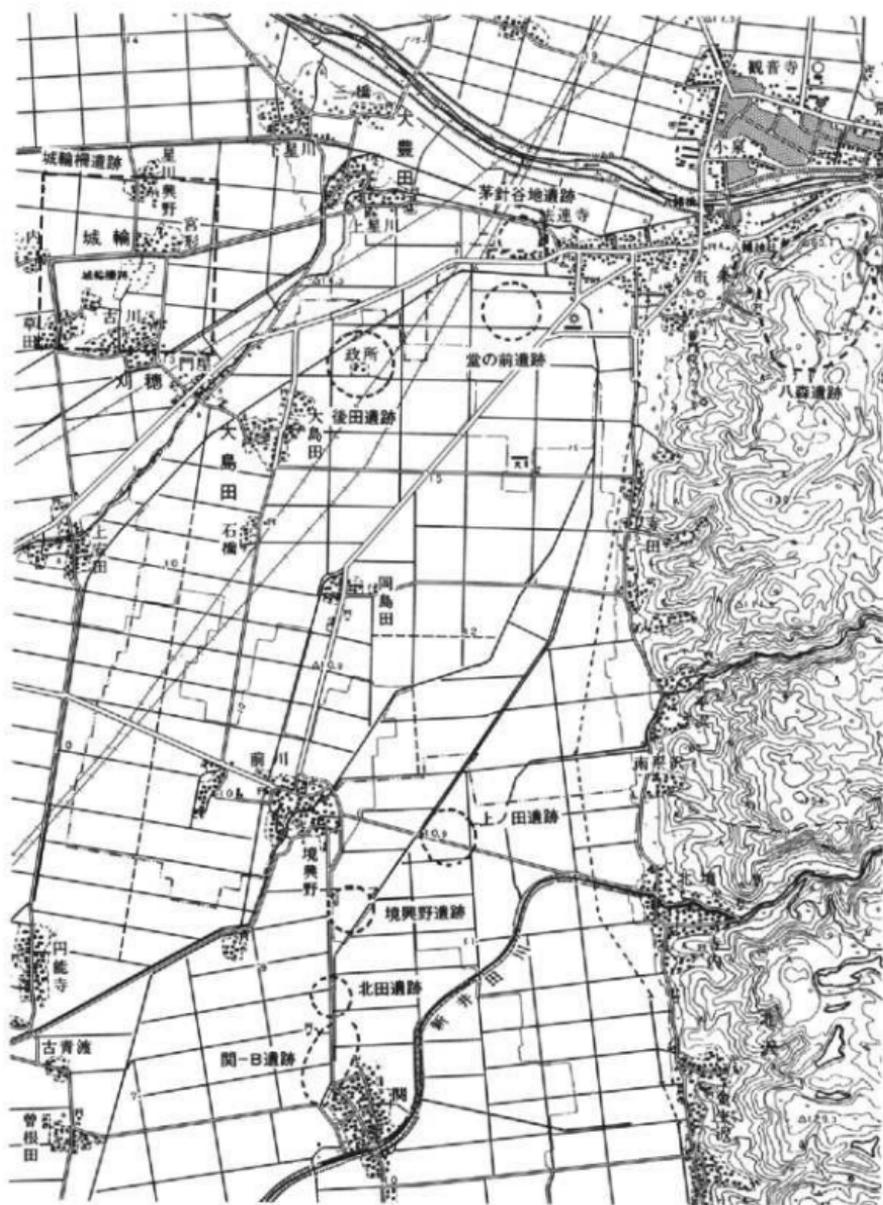
調査主体	山形県教育委員会
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者	山形県教育庁 庄内教育事務所埋蔵文化財分室 主任調査員 川崎利夫 (埋蔵文化財主査) 調査員 野尻 侃 (技 師) 安部 実 (技 師)
事務局	主 幹 小嶋茂太 (庄内教育事務所長兼埋蔵文化財分室長) 主幹補佐 佐藤良一 (庄内教育事務所次長) 事務局員 大須賀芳夫 (同 総務課長) 菅原 猛 (同 総務主査) 吉村庄子
調査協力	酒田市教育委員会 日向川土地改良区 最上川右岸土地改良事務所 酒田市立酒田中央高等学校考古学研究所

# 目 次

I	調査の経緯	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の概要	2
II	遺跡の概要	
1.	立地と環境	6
2.	遺跡の層序	7
III	遺構と遺物	
1.	遺 構	8
2.	遺 物	53
IV	ま と め	55

## 挿 図

第1図	遺跡位置図	第21図	SK26土壇跡出土土器
第2図	グリッド配置図	第22図	同 上・精査区内出土土器
第3図	試掘壕内遺物出土状況	第23図	SK27土壇跡
第4図	土 層 図	第24図	SK27土壇跡出土土器
第5図	SD1・25溝跡	第25図	SK63土壇跡
第6図	SK2土壇跡	第26図	SK63土壇跡出土土器
第7図	SD1・25溝跡出土土器	第27図	SD40溝跡出土土器
第8図	SK2土壇跡出土土器	第28図	SK64土壇跡
第9図	SK3土壇跡	第29図	SK64土壇跡出土土器
第10図	SK3土壇跡出土土器・石製品	第30図	SD67・45溝跡、SK68土壇跡
第11図	SK3土壇跡出土土器	第31図	同 上 出土土器
第12図	SK7土壇跡	第32図	SK143土壇跡
第13図	SK7土壇跡出土土器・石製品	第33図	SD135溝跡、SK143土壇跡出土土器
第14図	SK8土壇跡	第34図	SK145土壇跡
第15図	SK8土壇跡出土土器	第35図	SK145土壇跡出土土器
第16図	SK26土壇跡	第36図	SK146・147・148土壇跡
第17図	SK26土壇跡出土土器	第37図	SK147・148土壇跡出土土器
第18図	同 上	第38図	SK152土壇跡
第19図	同 上	第39図	SK152土壇跡出土土器
第20図	同 上	第40図	SK153土壇跡
		第41図	SK153土壇跡出土土器
		第42図	SK154土壇跡
		第43図	SK154土壇跡出土土器
		第44図	SK155・157・158土壇跡出土土器
		第45図	SK159土壇跡
		第46図	SK159・160土壇跡出土土器
		第47図	SK161土壇跡
		第48図	SK161土壇跡出土土器
		第49図	SB58・110建物跡
		第50図	遺構配置図
		第51図	赤焼土器編年表(試案)
		第52図	境典野遺跡と周辺の遺跡



1:25,000 羽後観音寺



第1図 遺跡位置図

# I. 調査の経緯

## 1. 調査に至る経過

酒田市の東部水田地帯に位置する境典野、北田、関Bの3遺跡は、地元の伊藤安記氏によってはやくから注目され、昭和38年版の「山形県遺跡地名表」にも登載されている。それによれば、須恵器や井戸跡などが発見されている遺跡である。昭和52年の「山形県遺跡地図」にも、佐藤禎宏氏の調査により平安時代の集落跡として記載されている。

これらの遺跡が、昭和55年度施工の県営ほ場整備事業の予定区域に入ることになったので、前年より関係各機関と協議を行ってきた。そして遺跡の範囲や性格、年代、遺物や遺構の包含層を確認するため、昭和54年10月17日より19日まで庄内教育事務所埋蔵文化財調査室(旧称)において試掘を含む事前調査を実施した。

それらの結果にもとづき、更に協議を重ねて昭和55年度に山形県教育委員会が主体となって緊急調査を行うことになった。そして昭和55年4月25日に、地元関係者、工事主体の最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市教育委員会、調査主体の県教委など東平田公民館に参集して打合せ会を開いた。それによって発掘調査は庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、5月12日から8月末日まで3遺跡の緊急調査を実施することになったのである。

## 2. 調査の概要

発掘調査は5月12日に開始し、8月27日に終了した。境典野・北田・関B遺跡の3ヶ所を同時に調査したわけであるが、本遺跡についての経過は、以下調査日誌抜すいのとおりである。

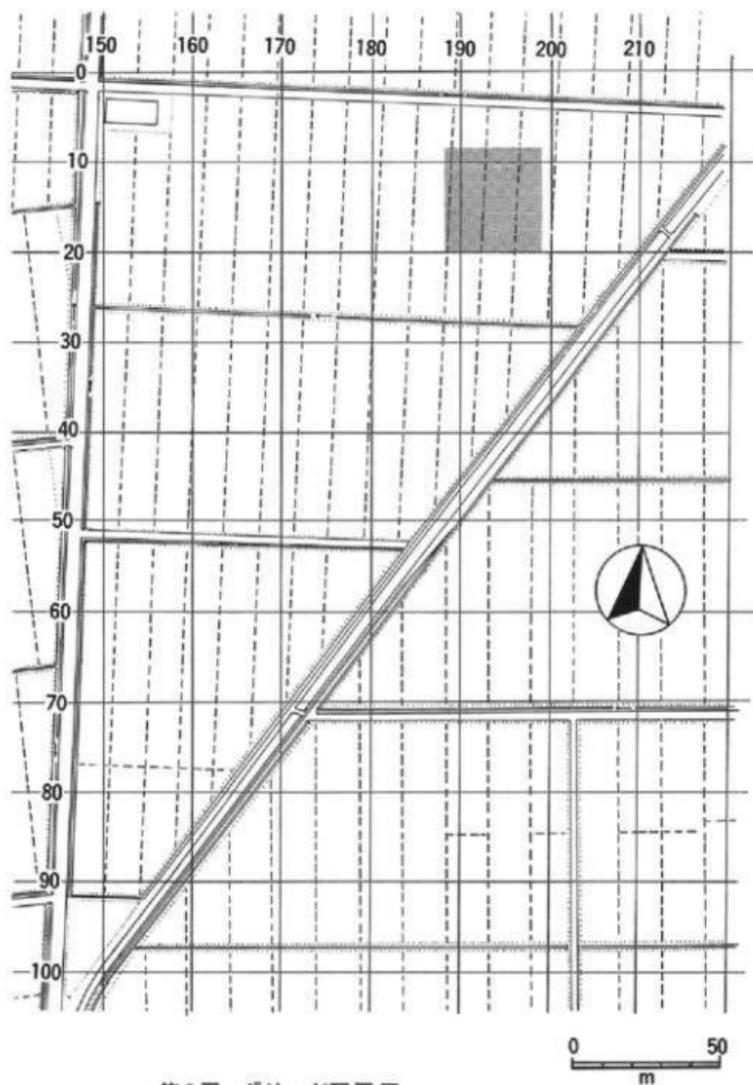
- 5月12日 雨 調査開始。試掘作業。南北に走る畦畔にそって1×2mの試掘坑を設ける。
- 5月13日 雨 試掘作業。土壌検出。写真撮影。
- 5月14日 晴 発掘器材運搬。試掘作業終了。遺跡遠景の写真撮影。
- 5月16日 曇 地区割り。
- 5月19日 晴 地区割り。
- 5月22日 雨 雨のためプレハブ内にて出土遺物の洗浄。
- 5月23日 晴 地区割り。
- 5月26日 雨 重機を使用しての表土除去。精査区を191~198-8~14グリッドとする。
- 5月27日 晴 精査・遺構検出作業。SK2・3土壌跡検出。SD1・25溝跡検出。
- 5月28日 晴 精査・遺構検出作業。一部、遺構掘り下げ。写真撮影。

- 5月29日 晴 精査・遺構検出作業。遺構掘り下げ。SK26土壌跡検出。写真撮影。
- 5月30日 晴 遺構掘り下げ。SK7・8、SD1・25セクション実測。写真撮影。
- 6月3日 雨 195～197-8-11グリッド精査。午後より雨のため出土遺物洗浄。
- 6月4日 晴 精査。写真撮影。遺構掘り下げ。SB58検出。
- 6月5日 晴 遺構掘り下げ。写真撮影。
- 6月6日 晴 遺構掘り下げ。土壌セクション実測。写真撮影。
- 6月9日 雨 雨のため出土遺物洗浄。地区割り。
- 6月10日 曇 重機を使用して188～190-8-19、15～19-188～199グリッドの表土除去を行い、精査区を拡張する。
- 6月11日 雨 重機を使用しての表土除去。
- 6月12日 晴 精査・遺構検出。土壌平面図実測。
- 6月13日 晴 精査・遺構検出。土壌平面図・セクション実測。写真撮影。
- 6月16日 曇 遺構掘り下げ。SK26土壌跡より土塊出土。写真撮影。
- 6月17日 雨 雨のため遺物洗浄作業。
- 6月20日 晴 精査・遺構検出作業。SB110建物跡検出。
- 6月23日 晴 精査・遺構検出作業。遺構掘り下げ。写真撮影。
- 6月24日 晴 遺構掘り下げ。写真撮影。
- 6月25日 晴 遺構掘り下げ。遺構平面図・セクション実測。写真撮影。
- 6月26日 雨 遺構掘り下げ。写真撮影。午後より雨のため遺物洗浄。
- 6月27日 雨 午前中、雨のため遺物洗浄。午後より遺構掘り下げ。平面図実測。写真撮影。
- 6月30日 晴 遺構掘り下げ。写真撮影。
- 7月1日 晴 精査区全域の写真撮影。平面図実測。
- 7月2日 晴 平面図実測。写真撮影。
- 7月3日 雨 平面図実測。
- 7月4日 曇 平面図実測。
- 7月10日 晴 平面図実測。
- 7月14日 雨 平面図実測。
- 7月17日 雨 平面図実測。
- 7月18日 曇 平面図実測。
- 7月24日 雨 地区割り。
- 7月31日 雨 重機を使用して188～198-20～25グリッドの表土除去を行い、精査区を拡張する。

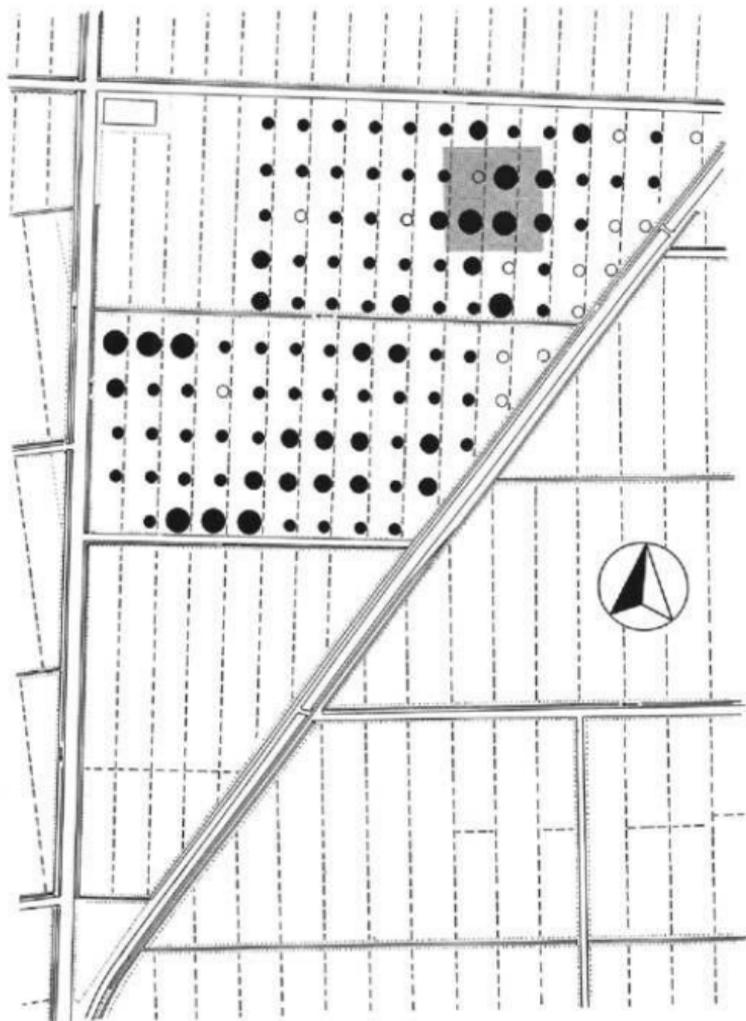
- 8月1日 雲 重機を使用しての表土除去。
- 8月4日 雲 明日の県民参加の発掘の準備。
- 8月5日 晴 県民参加の発掘。小・中・高校生、一般の県民約70名の参加を得た。
- 8月6日 晴 精査・遺構検出作業。
- 8月7日 晴 精査・遺構検出作業。
- 8月18日 雨 排水作業。
- 8月19日 雨 地区割り。
- 8月20日 雨 遺構掘り下げ。平面図・セクション実測。
- 8月21日 晴 精査作業。写真撮影。
- 8月22日 雲 平面図実測。写真撮影。
- 8月27日 雨 本日にて境興野・北田・関B遺跡の調査を終了。器材の撤収、調査区域の環境整備を行う。

昭和53年度から、県教育委員会の啓蒙事業の一つとして「県民参加の発掘」を実施している。今、55年度は境興野遺跡が実施地となった。7月31日、8月1日にかけて該当地域の表土剥ぎをバックホーで行い、面整理までを終えて当日の準備を行った。

8月5日の当日は、午前8時30分より受け付けを開始した。「埋蔵文化財とは何か」、「発掘調査の方法」、「境興野とその周辺の遺跡」などの事前学習を行い、現地での説明を終えて実際に発掘実習を行った。実習終了後、本日の成果についての報告とまとめを行い午後4時に終了した。



第2図 グリッド配置図



- 出土遺物無し    ● 1片～20片  
 ● 21片～40片    ● 40片～63片

0 50  
m

第3図 試掘壕内遺物出土状況

## II 遺跡の概要

### 1. 立地と環境

境興野遺跡は、酒田市大字境興野字家の東に所在する。庄内平野の北東部に位置し、酒田市街より北東7kmの水田中で標高10m前後である。1.5km東には、出羽丘陵の一部をなす鷹尾山を主峰とする低平な丘陵群が連なっている。

2.2km北北西には平安時代の出羽国府に擬定される城輪遺跡があり、その東には八幡町政所周辺に堂の前、後田、茅針谷地などの官衙跡や集落跡が点在する。また、さらに東の丘陵上には、出羽国府に関連すると考えられている八森遺跡がある。堂の前遺跡はまだ確証にとぼしいが、出羽国分寺が所在した遺跡との説もあり、八森遺跡については「三代実録」仁和3年(887年)によって9世紀末より10世紀前半、つまり城輪遺跡Ⅱ期に一時的に移転した国府跡とする説もある。酒田市東部から八幡町にいたる荒瀬川左岸より最上川右岸にいたる水田地帯は、平安時代における出羽国の政治的中枢部として各種の遺跡が存在するのである。

本遺跡のすぐ北東には昭和53～54年度に発掘調査された上ノ田遺跡があり、官衙風の大きな掘立柱建物をはじめ、井戸跡、溝跡、土壇などが確認されており、墨書土器もかなりの量を出土している。また本遺跡より関集落に至る幹線農道ぞいに北田遺跡、関B遺跡があり何れも平安時代の村落遺跡とみられるが、本遺跡と合わせて今年度一部の調査が行われた。さらに関部落を過ぎて横代に至る間には高阿弥陀遺跡があり、かつて喜田貞吉博士によって出羽国分尼寺に比定されたところでもある。大槻新田から手蔵田にかけては、また遺跡の密集地帯で柱根や多量の須恵器、墨書土器が出土している。

また東側の山麓には生石の延命寺があり、鷹尾山修験の道場として隆盛をきわめた時期もあった。境内や裏山には南北朝時代の自然石塔婆が数多くみられ、元享から応安までの在銘のものがある。延命寺境内自体が中世の館跡の中にあるが、他に朝日山城や山橋などこの付近には館跡も多く、比較的南朝系の銘をもつ塔婆が多いことから、鷹尾山修験と手を結んだ庄内における南朝の拠点とも考えられている。

この丘陵地帯には、すでに一部発掘調査が行われている額瀬、泉谷地などを含め、平田町から八幡町にいたるまで須恵器窯跡群が多数分布している。その数はおよそ100基を下るまいと思われるが、国衙とその周辺に須恵器を供給した一大窯業地帯であったと考えられ、9世紀前半からの窯跡が確認されている。このように本遺跡周辺は、古代から中世にかけて豊富な歴史的環境にあった地域ということができよう。

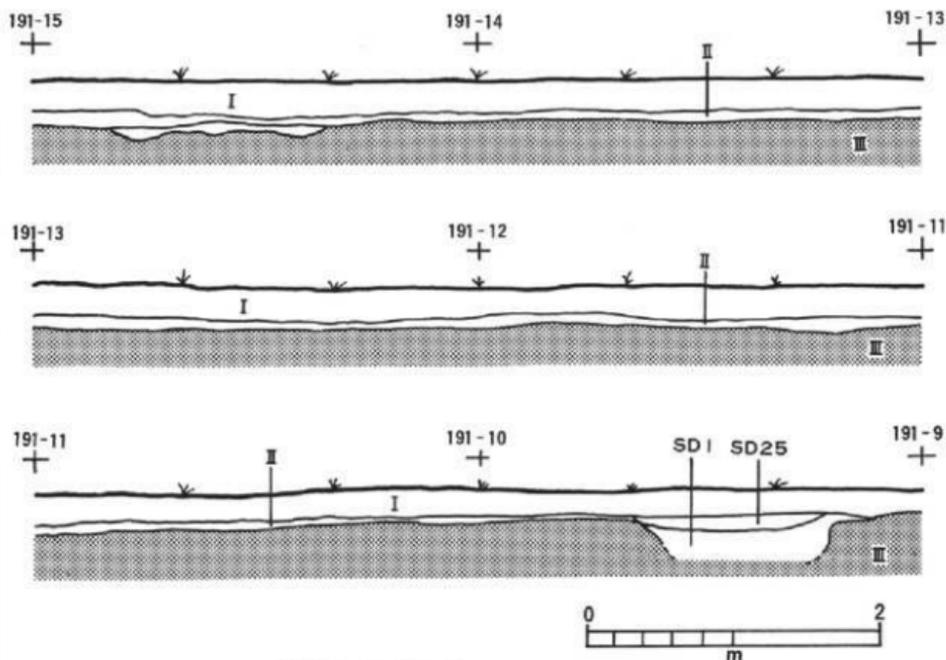
## 2. 遺跡の層序

境典野遺跡の層序は二層に分かれ、単純な層である。試掘調査においてもおおむね下記のような層であるが、調査区の南東辺では地山層が黄褐色砂礫層となっている所も一部ある。遺構はⅢ層を掘り込んで作られている。

第Ⅰ層 茶褐色微砂質土 耕作土である。しまっており粘性がある。厚さは10～22cmを測る。

第Ⅱ層 褐色微砂質土 遺物包含層である。炭化粒子を含み、しまっており粘性がある。厚さは3～12cmを測る。

第Ⅲ層 青灰色シルト 地山層である。硬くしまっている。



第4図 土層図

### Ⅲ 遺構と遺物

#### 1. 遺構

本調査で検出された遺構には掘立柱建物跡2、土壇28、溝跡、ピットなどがある。以下に、その概要を述べたい。

#### SD1溝跡

東北東方向に向く溝跡である。SD25に北西辺を切られており、本溝跡の方が古い。検出した範囲で溝の長さは約13m、幅は上場で120~200cm、深さは5~11cmを測る。

埋積土は1層だけで、暗褐色シルトでしまりがある。

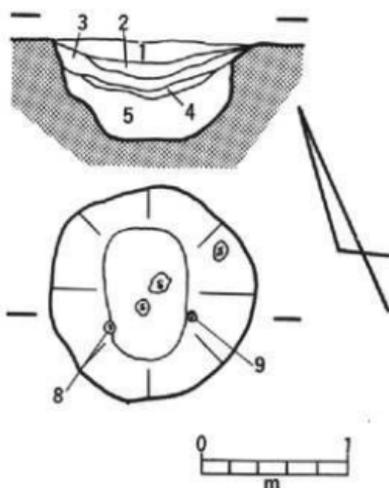
#### SD25溝跡

SD1溝跡を切って、これと平行して走っている溝跡である。幅は上場で130~200cm、深さは10~23cmを測る。

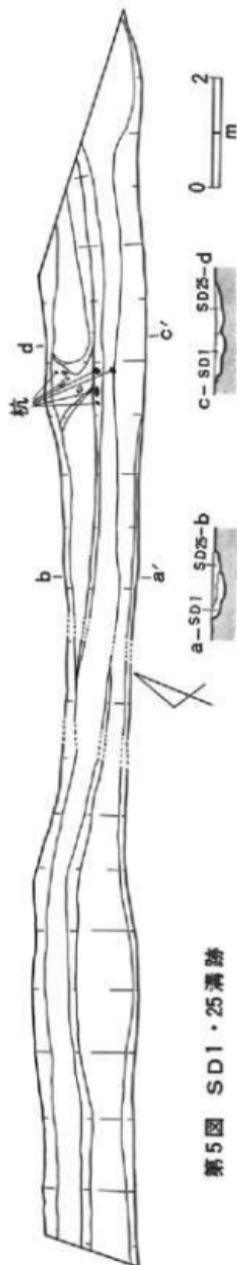
埋積土は1層だけで、暗茶褐色シルトで軟弱である。

#### SK2土壇跡

長径148cm、短径138cm、深さ68cmを測り、平面形が南北に長い楕円形を呈する土壇跡である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、深さ40cm付近から傾斜して底に至っている。底は平坦である。



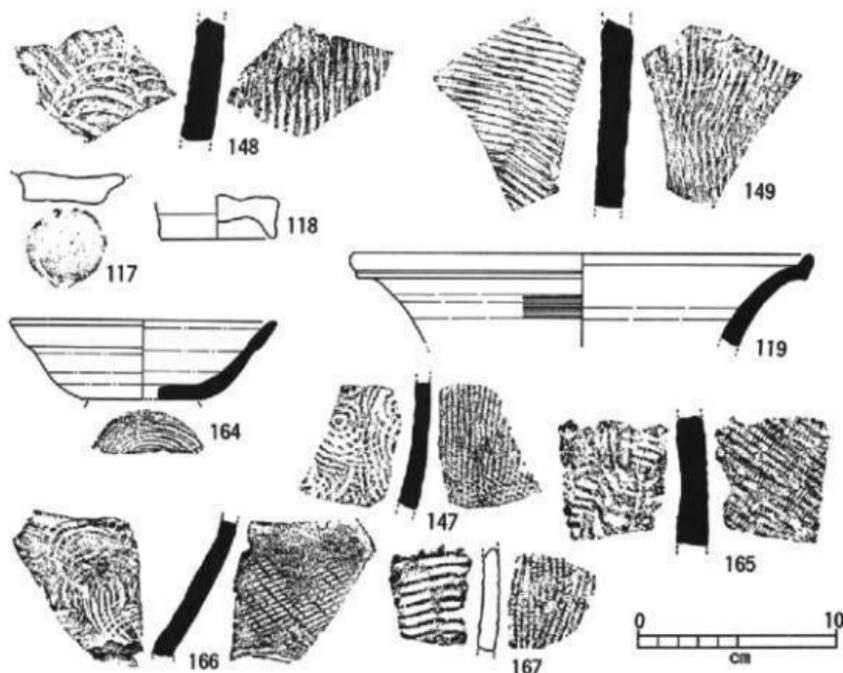
第6図 SK2土壇跡



第5図 SD1・25溝跡

## SD1・25溝跡出土土器

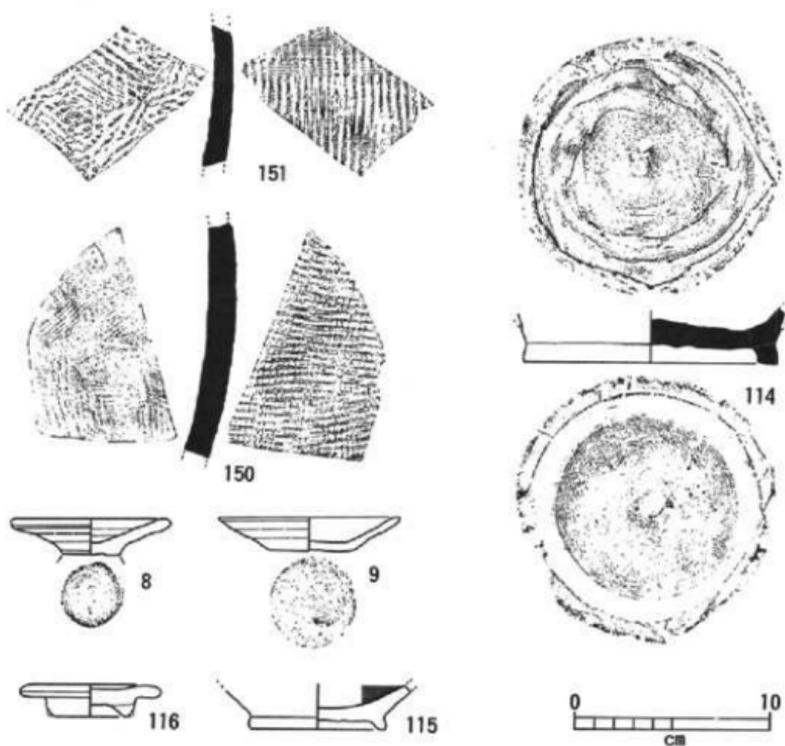
遺物 番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	調整技法 備考	出土地 点層位
			口径	底径	器高						
148	甕	須恵器				青灰色	良	良			SD1-1層
149	甕	須恵器				灰色	良	良			SD1-1層
117		赤焼土器		39		赤褐色	良	良	回転糸切り		SD1-1層
118		赤焼土器				赤褐色	粗砂混	良			SD1-1層
119		須恵器	230			灰色	良	良			SD1-1層
147	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			SD1-1層
164	環	須恵器	135	60	41	明褐色	良	良	回転糸切り		SD25-1層
166	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			SD25-1層
167	甕	赤焼土器				赤褐色	良	良			SD25-1層
165	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			SD25-1層



第7図 SD1・25溝跡出土土器

SK2土壇跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技	調整技法	出土層位
			口径	底径	器高						
151	甕	須恵器				暗青灰色	良	良		外面カキ目	2層
150	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			1層
114		須恵器				暗青灰色	良	良		底部・内外面カキ目	1層
8	皿	赤焼土器	82	30	19	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		3層
9	皿	赤焼土器	92	45	18	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		3層
116	高台皿	赤焼土器	72	45	165	赤褐色	良	良	回転糸切り		1層
115	高台皿	黒色土器		54		赤褐色	良	良		内面ミガキ	1層



第8図 SK2土壇跡出土土器

埋積土は5層に分けられた。1～4層はレンズ状に堆積している。1層は黒褐色微砂質土と暗青灰色シルトが、まだらに混じっている。2層も黒褐色微砂質土と暗青灰色シルトが、まだらに混じる。1層よりも暗青灰色シルトが多いために青っぽい色調である。3層も黒褐色微砂質土と暗青灰色シルトが、まだらに混じる。黒褐色微砂質土が多いため1層よりも黒っぽい色調である。4層は炭化物層であり、色調は黒く、もさもさしている。5層は暗青灰色シルト層で軟弱である。

遺物は主に1～4層より出土している。3層では礫片が多く、又、完形の赤焼土器小皿が2枚(第8図8・9)出土している。

### SK3土壌跡

第Ⅲ層上面で検出した。本調査で検出した土壌中、2番目に大きい規模のものである。長径370cm、短径350cm、深さ90cmを測る。平面形は東西に長い不整の楕円形を呈する。壁は急な傾斜をもち、底面付近で緩かになり底に至る。断面形は船底状を呈する。底面の平面形は一辺約160cmの方形を呈し、中央部でわずかに起伏している。

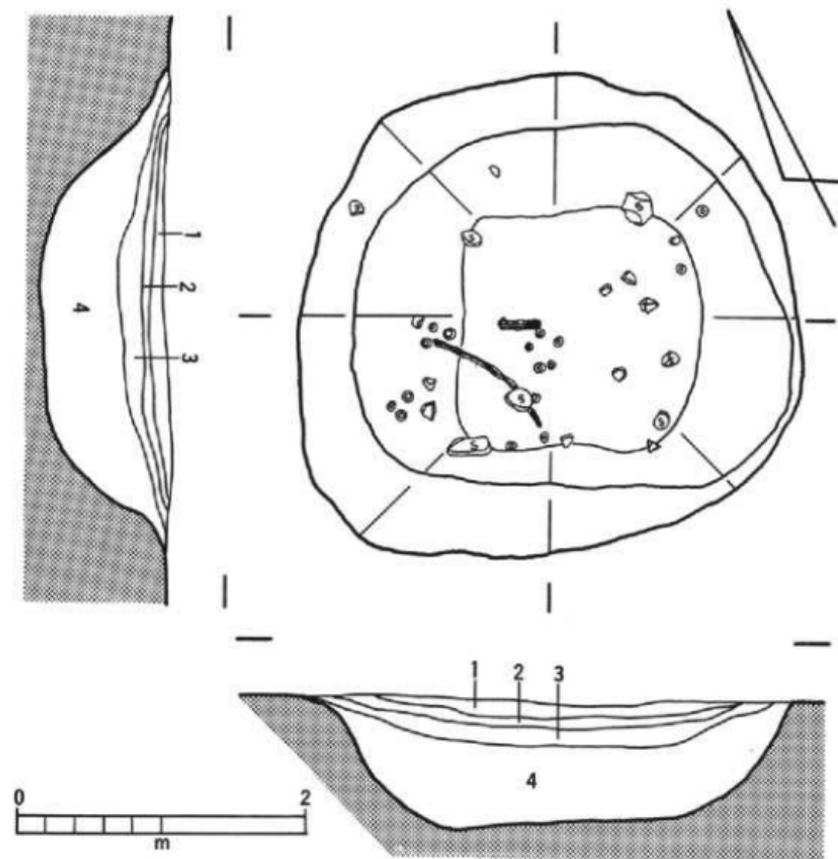
埋積土は4層に分けられた。1層は黒色微砂質土で多量の炭、焼礫を含み、硬くしまっている。2層は黒褐色微砂質土で多量の炭を含み軟弱で、もさもさしている。3層は黒色微砂質土で、炭を多量に含み軟弱である。4層は暗青灰色シルトで炭化粒子を含み軟弱で

### SK3土壌跡出土土器

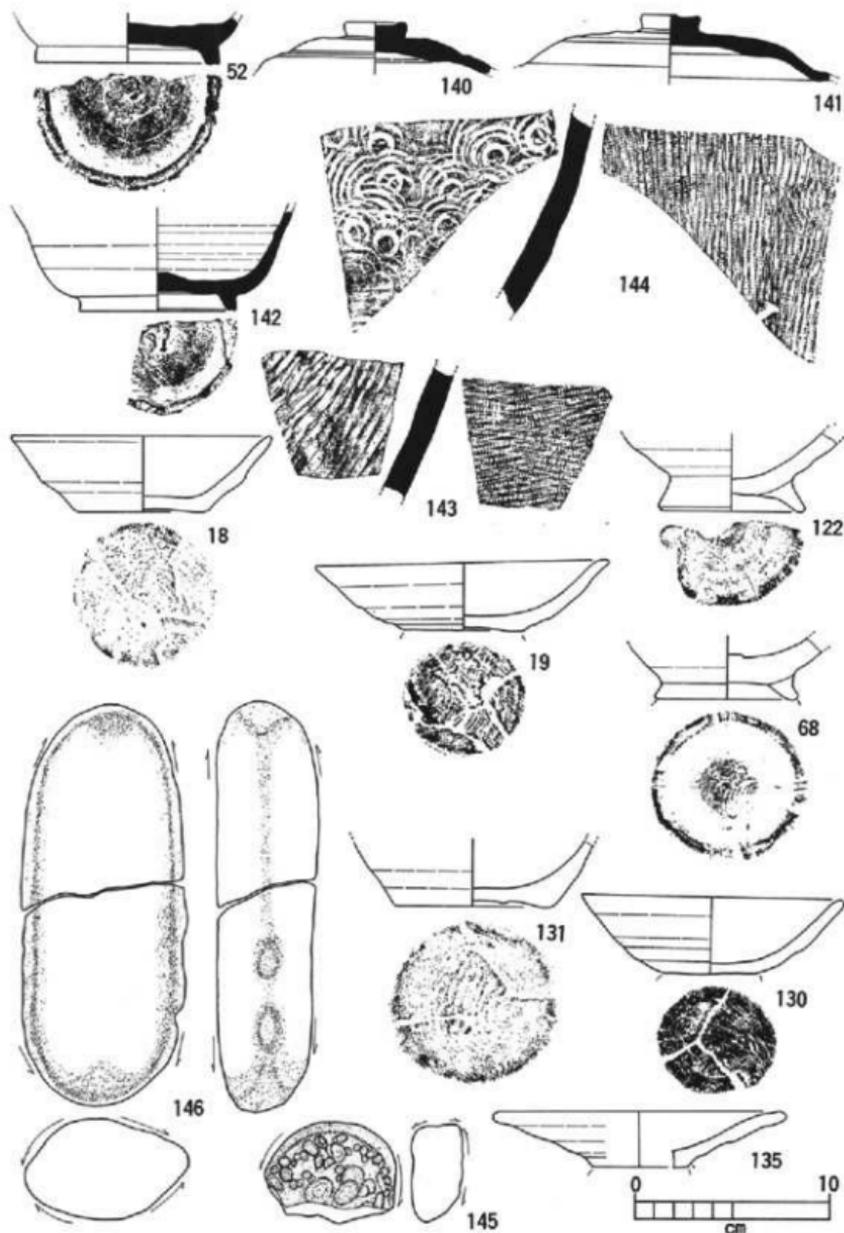
遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技	調整技法・備考	出土層位
			口径	底径	器高						
52	高台杯	須恵器		92		灰色	粗砂混	良	ヘラ切り	巻き上げ痕	3層
140	蓋	須恵器				灰色	良	良		外面スス付着	2層
141	蓋	須恵器				灰色	良	良			3層
142	高台杯	須恵器		79		暗青灰色	粗砂混	良	ヘラ切り		3層
144	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			4層
143	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			4層
18	杯	赤焼土器	131	67	40	明灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1層
19	杯	赤焼土器	148	60	38	明灰褐色	良	良	回転糸切り		1層
122		赤焼土器		60		赤褐色	粗砂混	良			2層
68		赤焼土器		67		暗灰褐色	良	良	回転糸切り	内面巻き上げ痕	3層
131		赤焼土器		80		茶褐色	粗砂混	良	回転糸切り		4層
130	杯	赤焼土器	135	52	45	茶褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外面スス付着	2層
135	皿	赤焼土器	147	50	29	茶褐色	粗砂混	良			1層

ある。炭化粒子は特に底部において顕著に認められ、又、燒礫・自然木片なども出土した。厚さは約50cmほどを測り、埋め土と考えられる。1～3層からは赤焼土器の小皿が多量に出土しており、ほとんどが破片であるが復元したものと底部の破片から見るに、底部回転糸切りの小皿が89個、高台付小皿で34個ほどである。

第10図の46と145は石製品である。146は長さ20.5cm、幅85cm、厚さ51cmを測り、断面形は菱形を呈する。凝灰石製である。図中の上部は4層から、下部は2層から出土しており接合することが出来た。4層から出土したものはススが付着している。両面とも研磨されており、両縁には敲きの痕がある。用途は不明である。145は軽石で、一面を残して研磨されている。これも用途は不明である。



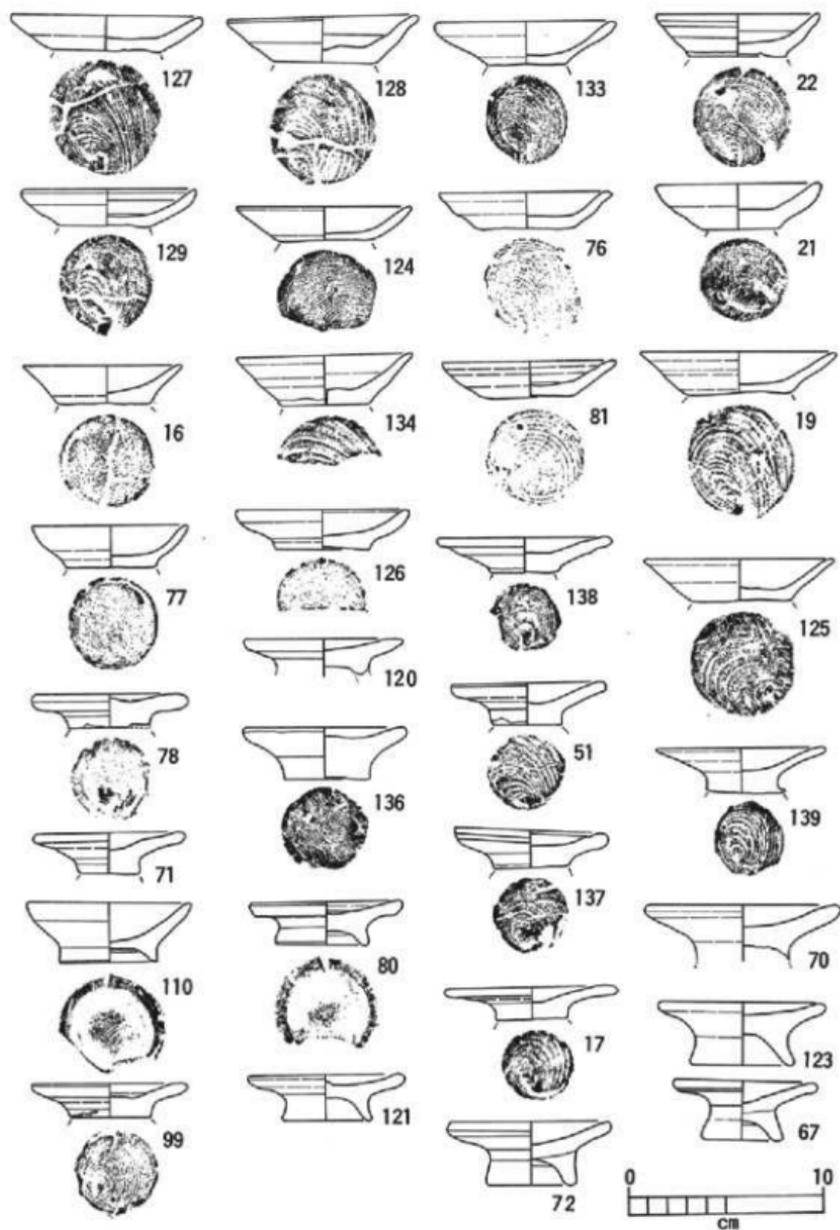
第9図 SK3土坑跡



第10圖 SK3土坑跡出土土器・石製品

## SK3土壌跡出土土器

遺物 番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	調整技法・備考	出土 層位
			口径	底径	器高						
127	小皿	赤焼土器	106	55	22	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
128	小皿	赤焼土器	97	54	26	明灰褐色	良	良	回転糸切り		2層
133	小皿	赤焼土器	92	40	22	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		4層
22	小皿	赤焼土器	84	50	22	褐色	良	良	回転糸切り		2層
129	小皿	赤焼土器	80	50	21	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外面スス付着	3層
124	小皿	赤焼土器	89	48	20	赤褐色	良	良	回転糸切り		3層
76	小皿	赤焼土器	88	50	20	明褐色	良	良	回転糸切り		2層
71	小皿	赤焼土器	84	41	24	明灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
16	小皿	赤焼土器	80	47	19	明灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1層
134	小皿	赤焼土器	89	45	25	明灰褐色	良	良	回転糸切り		3層
81	小皿	赤焼土器	88	48	29	明褐色	良	良	回転糸切り		4層
308	小皿	赤焼土器	98	56	25	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
77	小皿	赤焼土器	80	46	22	明褐色	良	良	回転糸切り		2層
126	小皿	赤焼土器	89	48	21	赤褐色	良	良	回転糸切り		4層
120	高台小皿	赤焼土器	80	50		淡赤褐色	良	良			3層
138	小皿	赤焼土器	88	35	19	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		4層
125	小皿	赤焼土器	91	53	22	明褐色	良	良	回転糸切り		2層
78	小皿	赤焼土器	78	42	17	淡赤褐色	良	良	回転糸切り		4層
71	小皿	赤焼土器	78	30	22	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1層
136	小皿	赤焼土器	80	43	27	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		3層
51	小皿	赤焼土器	80	40	22	明褐色	良	良	回転糸切り	内外面スス付着	3層
139	小皿	赤焼土器	86	37	25	明褐色	良	良	回転糸切り		2層
110	高台小皿	赤焼土器	85	50	31	明褐色	良	良	回転糸切り	内外面スス付着	4層
80	高台小皿	赤焼土器	80	47	22	淡赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面スス付着	4層
137	小皿	赤焼土器	78	39	22	明褐色	良	良	回転糸切り	底部スス付着	4層
70	皿	赤焼土器	101	49		明褐色	良	良		内面スス付着	3層
79	小皿	赤焼土器	80	43	19	明褐色	良	良	回転糸切り		4層
121	高台小皿	赤焼土器	82	43	23	明褐色	良	良	糸		3層
17	小皿	赤焼土器	87	36	19	明褐色	良	良	回転糸切り		1層
72	高台小皿	赤焼土器	83	46	32	淡赤褐色	良	良			2層
123	高台小皿	赤焼土器	85	50	34	明褐色	粗砂混	良			3層
67	高台小皿	赤焼土器	72	32	31	明褐色	粗砂混	良			3層



第11圖 SK3土壤跡出土土器

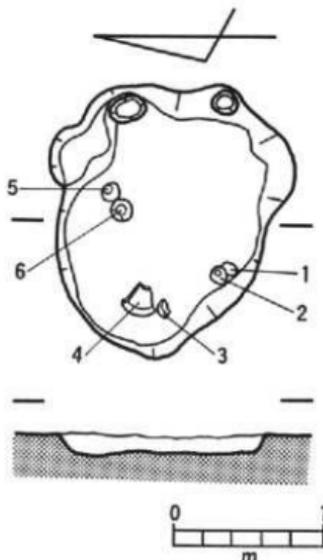
### SK7土壙跡

第Ⅲ層上面で検出した。長径192cm、短径154cm、深さ14cmを測る。平面形は東西に長い楕円形を呈する。底は、わずかに起伏する。

東辺にピットが2基検出されたが、本土壙との関係は未詳である。

埋積土は1層で、黒褐色微砂質土（多量の炭化粒子を含む）と、暗青灰色シルトが、まだらに混じり合っている。

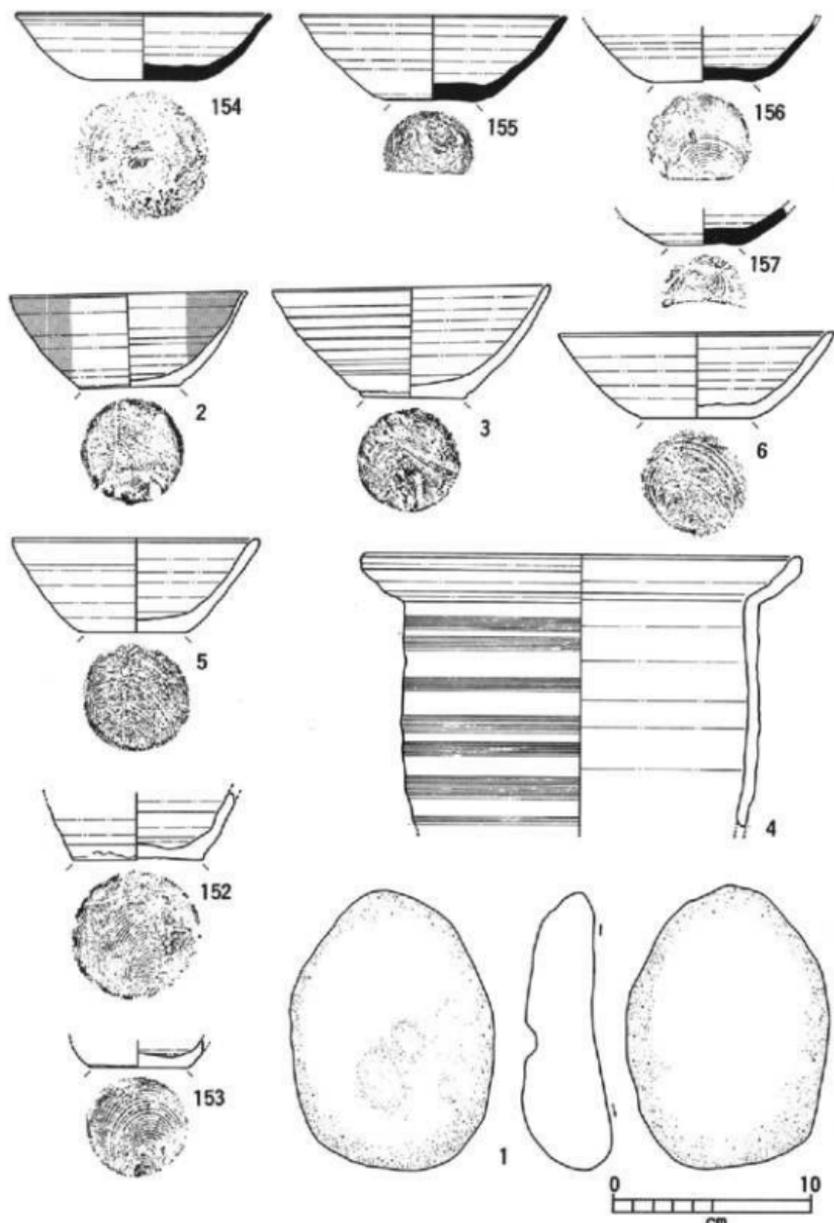
第13図1は石製品で、長さ14.4cm、幅24cm、厚さ4.1cmを測る。材質は石英粗面岩で、扁平な河原石を利用したものである。片面は研磨されたものらしく湾曲しており、その裏面は中央に長径1.9cm、短径1.5cm、深さ0.6cmの楕円形の凹みを有している。用途は不明である。



第12図 SK7土壙跡

### SK7土壙跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法・備考	出土層位
			口径	底径	器高						
154	坏	須恵器	130	70	33	暗灰色	良	良	ヘラ切り	巻き上げ痕	1層
155	坏	須恵器	135	45	47	灰色	良	良	回転糸切り		1層
156	坏	須恵器		51		灰色	良	良	回転糸切り		1層
157	坏	須恵器		38		青灰色	良	良	回転糸切り		1層
2	坏	黒色土器	120	52	49	黒色	良	良	糸切り	内面ミガキ	1層
3	坏	赤焼土器	141	51	59	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1層
6	坏	赤焼土器	140	52	43	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1層
5	坏	赤焼土器	125	50	50	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1層
152	甗	赤焼土器		66		灰褐色	良	良	回転糸切り	外面スス付着	1層
4	甗	赤焼土器	222			赤褐色	良	良		外面スス付着・カキ目	1層
153	甗	赤焼土器		50		茶褐色	良	良	回転糸切り	外面スス付着	1層



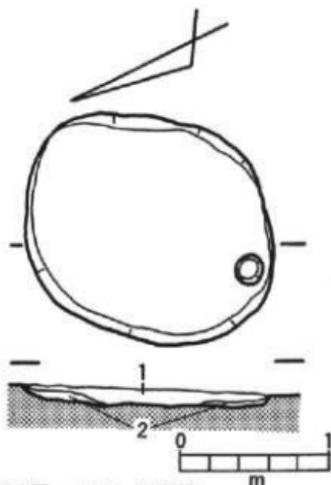
第13圖 SK7土壙跡出土土器・石製品

### SK8土壌跡

第Ⅲ層上面で検出した。長径184cm、短径154cm、深さ10cmを測る。平面形は東西に長い楕円形を呈する。底は全域にわたって平坦である。

南辺でピットを1基検出したが、本土壌との関係は未詳である。

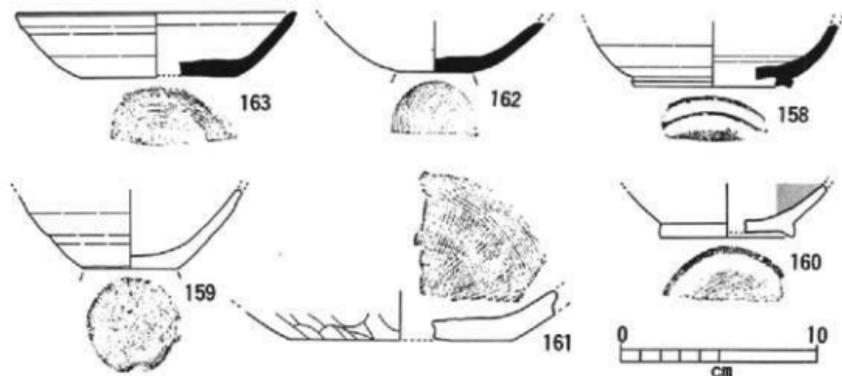
埋積土は2層に分けられた。1層は黒褐色微砂質土と青灰色シルトがまだらに混じり、炭化粒子を含む。2層は暗青灰色シルトに炭化粒子を含む。



第14図 SK8土壌跡

### SK8土壌跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法考	出土層位
			口径	底径	器高						
163	坏	須恵器	140	78	33	灰色	良	良	ヘラ切り		1層
162	坏	須恵器		39		灰白色	良	良	回転糸切り		1層
158		須恵器		80		暗灰色	良	良			1層
159	坏	赤焼土器		48		赤褐色	良	良	回転糸切り		1層
161		赤焼土器		115		灰白色	良	良		内面カキ目	1層
160	高台坏	黒色土器		67		灰白色	良	良		内面ミガキ	1層



第15図 SK8土壌跡出土土器

## SK26土壌跡

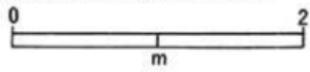
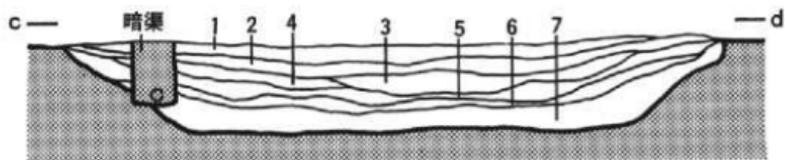
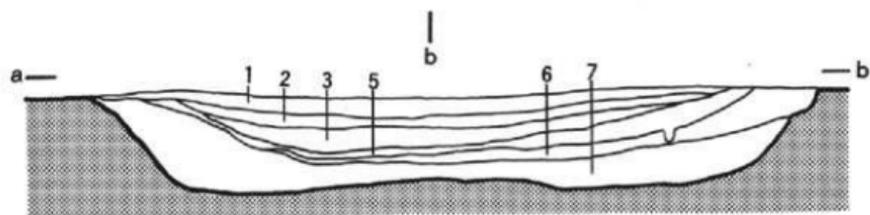
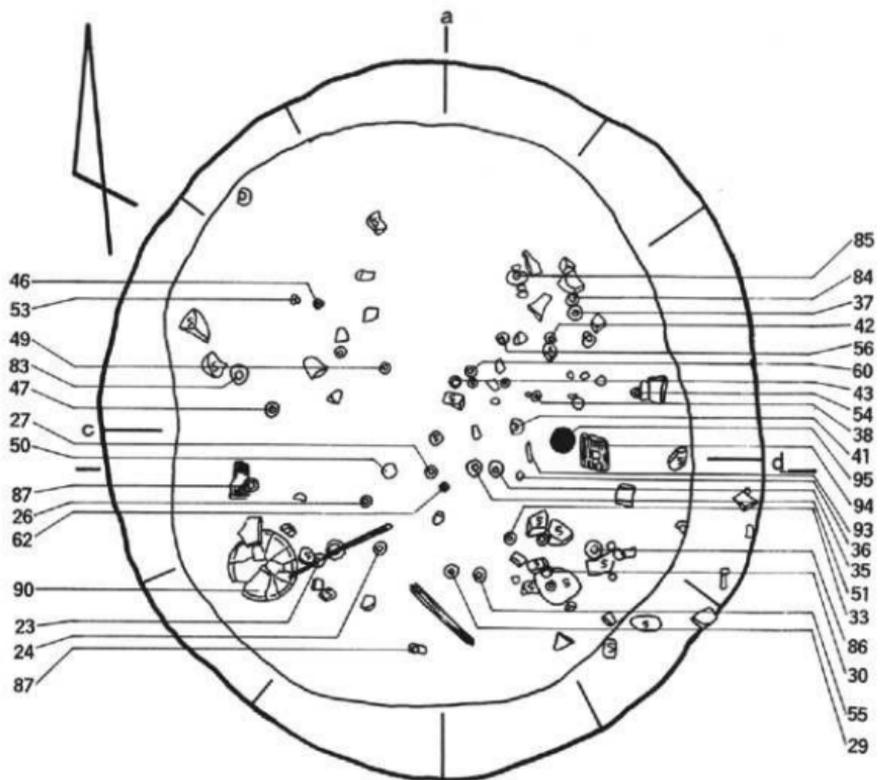
精査区北辺で、SK3土壌跡に近接して発見された。本調査で発見された土壌としては最大規模のものである。土壌西辺を一部、暗渠によって切られている。長径490cm、短径450cm、深さ68cmを測る。平面形は、南北に長い楕円形を呈する。壁は、約45°程度の傾斜を持って掘り込まれている。底面は、中央部がわずかに盛り上っている他は平坦である。

埋積土は7層に分けられたが、上層の焼成炭化物を多量に含む層と、下層のシルト層とに大きく分けられる。1層は黒色微砂質土で、炭化物と暗青灰色シルトをまだらに含む他、小礫を含み硬くしまっている。2層は黒色微砂質土で、炭化物と暗青灰色シルトをまだらに含む。軟質で、もさもさしており灰も含む。暗青灰色シルトが多いためか1層より明るい。3層は黒色微砂質土で炭化物を多量に含む軟質であり、1層よりも黒い。クルミが1個出土している。4層は暗灰褐色微砂質土で、灰がぎっしりつまっている。軟質で、もさもさしている。5層は黒褐色微砂質土で、炭化物を含む。軟質で、もさもさしている。6層は黒褐色シルトで、軟質で粘性がある。5層よりも明るい。7層は暗茶褐色シルトで、炭化粒子を含む。非常に軟質で粘性がある。

1～3層及び7層からは、拳大から直径30cm内外の礫が出土している。7層からは自然木や加工を受けた木片が、燃えさしの状態で出土している。

本土壌跡もSK3土壌跡同様に、多量の赤焼土器小皿が1～4層に集中して出土している。破片が多いが、底部片から算出された数は小皿で135個、高台付小皿で32個である。又、底からは赤焼土器の塀(第22図90)が出土している。第21図82・94・89・303は木製品である。82は断面形が階段状を呈しており、一辺が厚くなっている。長さ28.4cm、最大幅6.5cm、最小幅4cm、厚さは2.5cmと2cmを測る。94は長さ20.4cm、幅17cm、厚さ2cmを測る。図中、下端に切断の痕がある。中央に長辺4.9cm、短辺3.55cmの矩形の穴をうがっている。片面は、焼成を受けて炭化している。89は長さ152cm、幅90cm、厚さ3cmを測る。図中、上下両端、及び右辺に切断の痕がある。片面は、焼成を受けて炭化している。303は長さ20cm、幅2.1cm、厚さ0.45cmを測る。図中、上端に幅0.4cmの桜の皮がまかれていた。曲げ物の一部かと考えられる。95は、土壌の底で検出された漆器である。全体に厚く黒漆が塗られている。底部が欠損しているため全体の器形は不明であるが、皿状のものかと考えられる。

第22図306は製塩土器と考えられるものである。内外面に幅約2cmで、明瞭な輪積み痕が認められる。外面は無文で粗雑である。内面はナデ調整が行われ平滑である。粗砂の他に細礫が混じっている。



第16圖 SK26土壙跡

## SK 26土竪跡出土土器

遺物 番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	調整技法・備考	出土 層位
			口径	底径	器高						
87	蓋	須恵器				暗青灰色	良	良		転用	礎底面
291	坏	須恵器	127	70	31	灰色	良	良			6層
292	坏	須恵器		55		灰色	良	良	回転糸切り	内面スス付着	7層
293	坏	須恵器		90		灰色	粗砂混	良	ヘラ切り		6層
295	高台坏	須恵器		75		青灰色	良	良			4層
204		須恵器				灰色	良	良			6層
301		須恵器				灰色	良	良			2層
300		須恵器				黒灰色	良	良			1層
296		須恵器		70		黒灰色	粗砂混	良	回転糸切り		7層
229		須恵器		95		青灰色	良	良		体部外面に線刻「大」カ	2層
298		須恵器				黒灰色	良	良		体部内面にカキ目	2, 6, 7層
297		須恵器				灰色	良	良			2, 4層
84	手付瓶	灰釉陶器	83	126	(220)	淡緑色	良	良	ヘラ切り	SK27出土破片と接合	2層底面
35	坏	赤焼土器	140	64	42	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面炭化物付着	3層
29	坏	赤焼土器	138	65	36	赤褐色	良	良	回転糸切り		3層
34	坏	赤焼土器	135	55	43	明赤褐色	小礫混	良	回転糸切り		3層
108	坏	赤焼土器	122	62	41	赤褐色	良	良	回転糸切り		5層
267	坏	赤焼土器	148	65	40	灰白色	良	良	回転糸切り		2層
285	坏	赤焼土器	141	78	42	茶褐色	良	良	回転糸切り		2層
286	坏	赤焼土器	134	64	40	灰褐色	良	良	回転糸切り	内外面一部スス付着	3, 7層
43	坏	赤焼土器	136	62	39	茶褐色	小礫混	良	回転糸切り		3, 7層
61	高台皿	赤焼土器	135	43	44	赤褐色	良	良		内面炭化物付着	2層
289	高台皿	赤焼土器	144	67	39	茶褐色	良	良	回転糸切り	内面スス付着	1, 3, 7層
287	高台坏	赤焼土器	140	67	54	赤褐色	良	良			2層
288	高台坏	赤焼土器	123	60	52	灰白色	粗砂混	良	回転糸切り		4層
33	高台皿	赤焼土器	165	71	49	灰褐色	良	良			3層
284	高台皿	赤焼土器	145	60	49	灰褐色	粗砂混	良			3, 7層
32	高台皿	赤焼土器	105	53	51	灰褐色	良	良			2層
48	高台皿	赤焼土器	140	50	50	灰褐色	小礫混	良			1層
86	高台皿	赤焼土器	144	70	52	灰白色	粗砂混	良			底面

## SK 26土壌跡出土土器

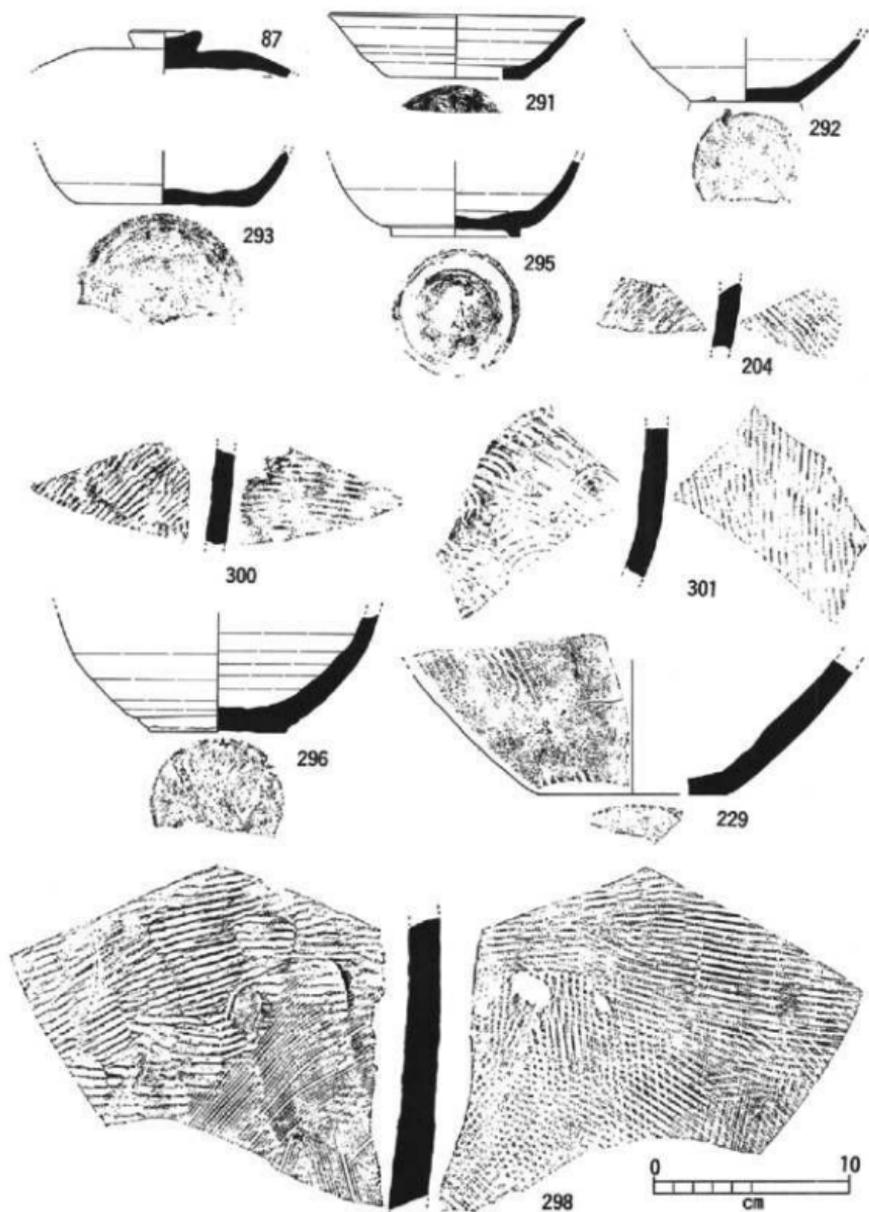
遺物 番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	調整技法・備考	出土 層位
			口径	底径	器高						
282		赤焼土器		69		赤褐色	良	良	回転糸切り		7層
273	小皿	赤焼土器	104	50	23	灰白色	粗砂混	良			2層
62	高台皿	赤焼土器	105	60		灰白色	良	良	回転糸切り		1層
276	高台皿	赤焼土器	98	50	43	茶褐色	良	良	回転糸切り		3、7層
269	小皿	赤焼土器	105	30	27	灰褐色	良	良	回転糸切り		1層
268	小皿	赤焼土器	95	50	24	灰白色	良	良	回転糸切り		3、7層
66	小皿	赤焼土器	90	40	22	赤褐色	良	良	回転糸切り		2層
53	小皿	赤焼土器	91	50	18	赤褐色	良	良	回転糸切り		3層
272	小皿	赤焼土器	100	60	19	赤褐色	良	良	回転糸切り		2層
23	小皿	赤焼土器	82	39	19	赤褐色	小礫混	良	回転糸切り		3層
39	小皿	赤焼土器	85	45	23	灰白色	粗砂混	良	回転糸切り		3層
56	小皿	赤焼土器	95	48	21	灰白色	良	良	回転糸切り		2層
54	小皿	赤焼土器	88	37	28	茶褐色	良	良	回転糸切り	内面・底面にスス付着	3層
274	小皿	赤焼土器	88	40	23	赤褐色	良	良	回転糸切り		2層
266	小皿	赤焼土器	90	48	26	灰白色	良	良	回転糸切り		5層
55	小皿	赤焼土器	95	48	26	茶褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
107	小皿	赤焼土器	92	47	25	灰白色	良	良	回転糸切り		5層
25	小皿	赤焼土器	95	45	21	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
112	小皿	赤焼土器	85	40	26	灰白色	良	良	回転糸切り		5層
31	小皿	赤焼土器	90	50	20	赤褐色	良	良	回転糸切り		2層
83	小皿	赤焼土器	95	50	25	灰褐色	良	良	回転糸切り		6層
105	小皿	赤焼土器	84	40	23	灰白色	良	良	回転糸切り		5層
15	小皿	赤焼土器	80	47	18	灰白色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
265	小皿	赤焼土器	65	44	18	茶褐色	良	良	回転糸切り		3層
271	小皿	赤焼土器	85	35	18	赤褐色	良	良	回転糸切り		1層
270	小皿	赤焼土器	80	30	22	茶褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1、2層
28	小皿	赤焼土器	77	30	26	赤褐色	良	良	回転糸切り		1層
103	小皿	赤焼土器	80	30	20	灰褐色	良	良	回転糸切り		5層
109	高台皿	赤焼土器	80	44	24	赤褐色	良	良			5層
30	小皿	赤焼土器	70	28	22	灰褐色	良	良	回転糸切り	内面一部スス付着	1層

## SK 26土坑跡出土土器

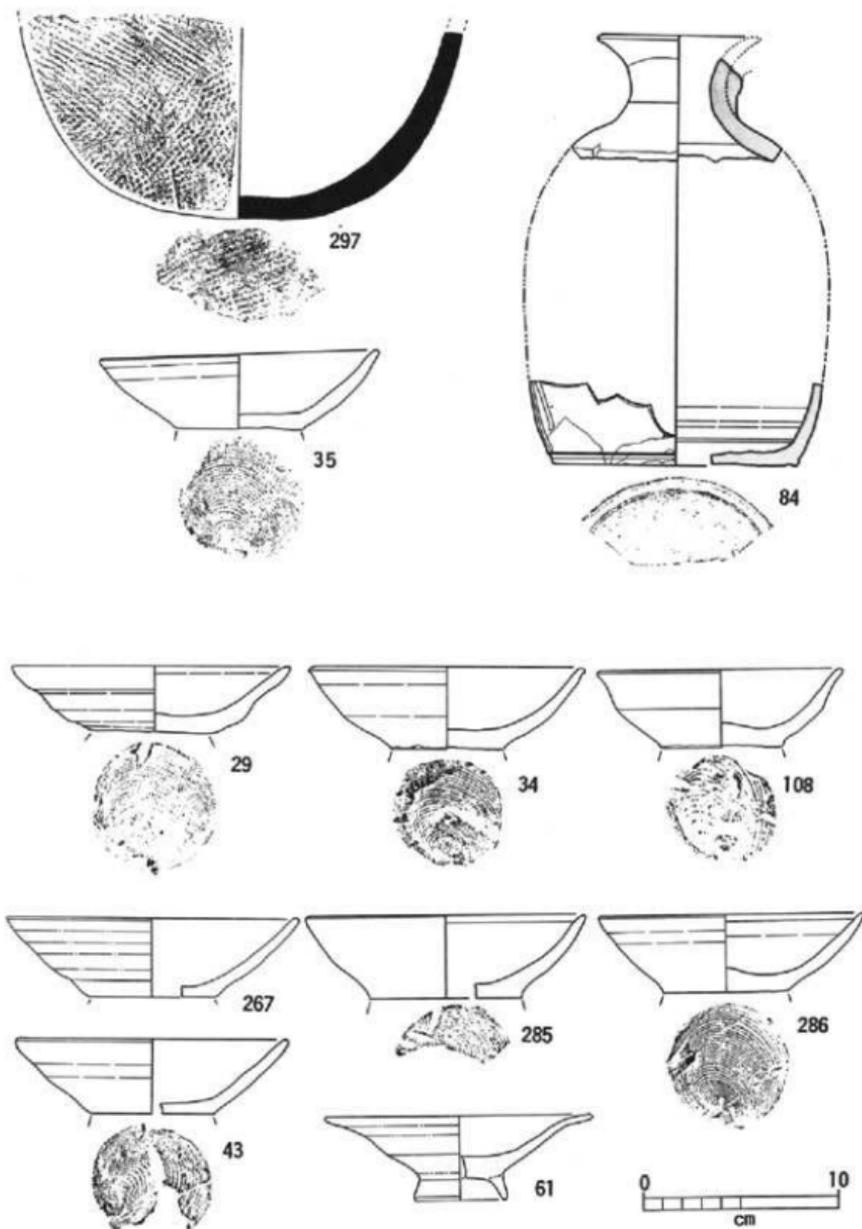
遺物 番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	調整技法・備考	出土 層位
			口徑	底徑	器高						
104	小皿	赤焼土器	77	37	17	赤褐色	良	良	回転糸切り		5層
277	高台皿	赤焼土器	72	50	23	茶褐色	良	良			3層
49	高台皿	赤焼土器	72	42	24	赤褐色	良	良			3層
24	小皿	赤焼土器	75	45	18	茶褐色	良	良	回転糸切り		3層
113	小皿	赤焼土器	75	39	19	灰白色	良	良	回転糸切り		5層
279	高台皿	赤焼土器	70	49	21	茶褐色	良	良		内外面スス付着	2層
45	高台皿	赤焼土器	75	43	23	赤褐色	良	良			3層
275	高台皿	赤焼土器	80	40	31	赤褐色	良	良			2層
283	高台皿	赤焼土器	80	40		赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
58	高台皿	赤焼土器	85	45	30	赤褐色	良	良			3層
280	高台皿	赤焼土器	75	43	21	茶褐色	良	良		二次焼成の鳥ス付着	2層
37	高台皿	赤焼土器	90	53	43	赤褐色	良	良		内面に横位のカキ目	2層
46	高台皿	赤焼土器	84	45		赤褐色	良	良			3層
281	高台皿	赤焼土器		64		灰白色	良	良		脚部に爪による刺突痕	6層
278	高台皿	赤焼土器	72	45	25	茶褐色	良	良			2層
47	高台皿	赤焼土器	72	45	28	赤褐色	良	良			3層
85	高台環	黒色土器	150	72	60	茶褐色	良	良		内面ミガキ	底面
88	高台環	黒色土器	130	56	52	灰白色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ	底面
10		黒色土器	30	19	23	黒色	良	良		内外面・底面にミガキ	2層
90	埴	赤焼土器	383		132	灰褐色	良	良		体部外面ヘラ削り 体部外面スス付着	底面
306	深鉢型	製磁土器	(225)	(105)	(230)	赤褐色	粗砂混	可			7、6層

## 精査区内出土土器

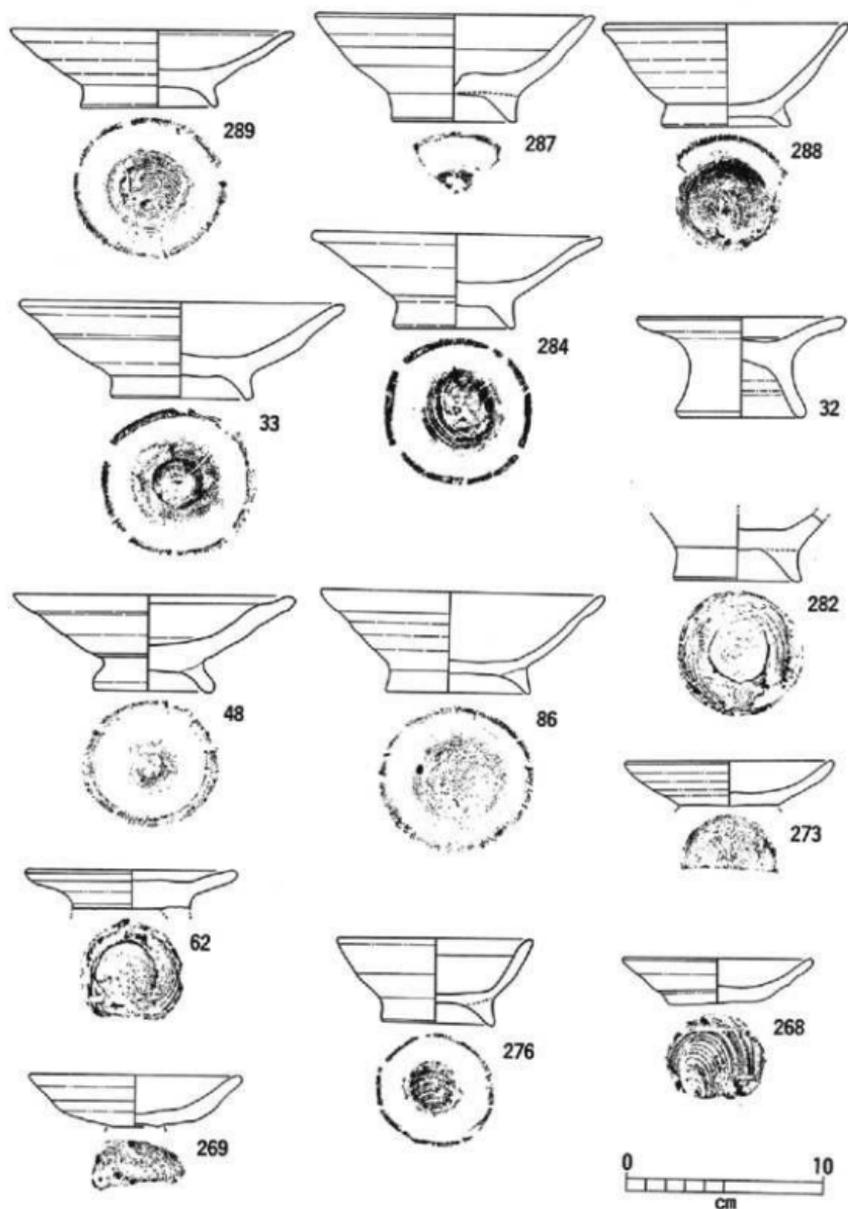
遺物 番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	調整方法 備考	出土地 層位
			口徑	底徑	器高						
290	環	須恵器		57		灰白色	良	良	回転糸切り	底部に墨書	精査区内Ⅲ層
264	釜	赤焼土器	(210)			赤褐色	粗砂混	良			190-20-II層



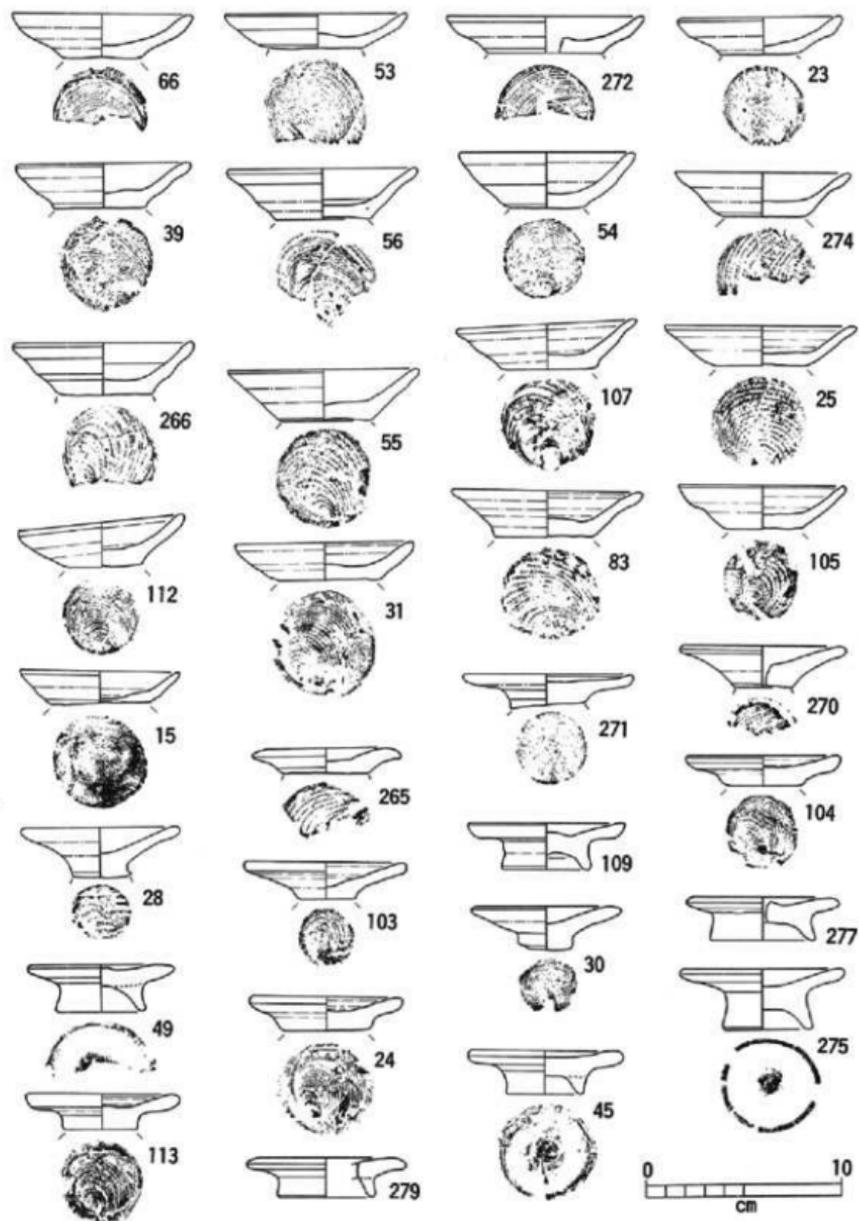
第17圖 SK26土壙跡出土土器



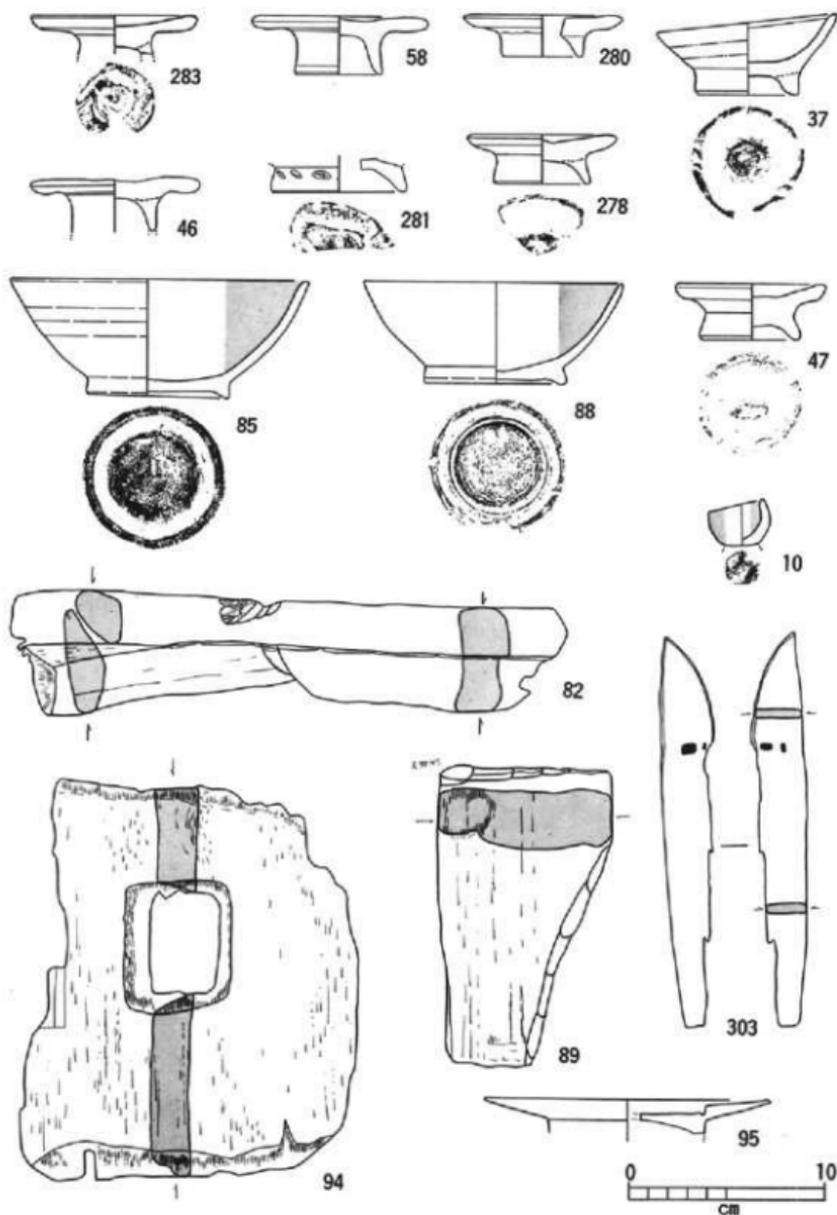
第18図 SK26土壙跡出土土器



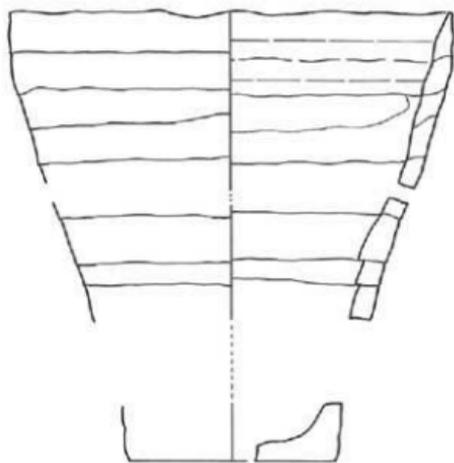
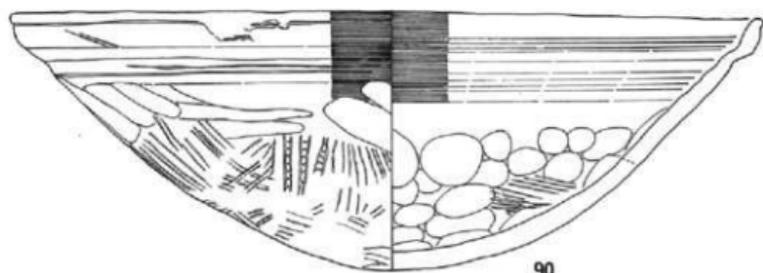
第19図 SK26土壙跡出土土器



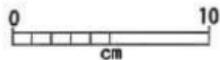
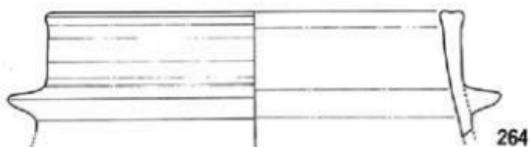
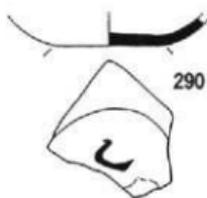
第20圖 SK26土坑跡出土土器



第21圖 SK26土壙跡出土土器・木製品



精查区内Ⅲ層出土土器



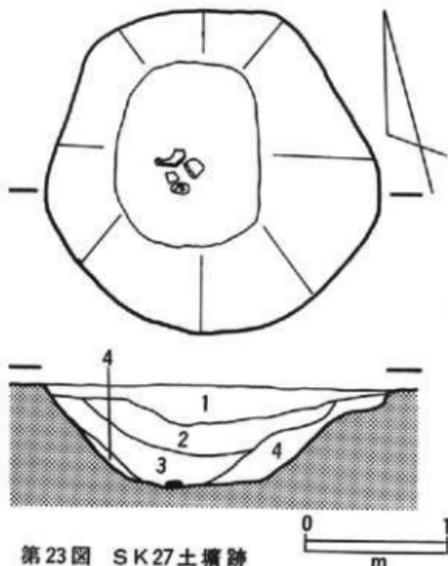
第22圖 SK26土囊跡・精查区Ⅲ層出土土器

### SK27土壙跡

第Ⅲ層上面で検出した。長径224cm、短径210cm、深さ66cmを測る。平面形は南北に長い不定形を呈する。壁は約45°の傾斜を測る。底は、全域にわたって平坦である。

埋積土は4層に分けられた。1層は黒色微砂質土で、炭化粒子、青灰色粒子を含む。焼礫がわずかに出土した。2層は暗青灰色シルトで、炭化粒子を含み軟弱である。3層は暗茶褐色シルトで、炭化粒子を含み軟弱である。4層は青灰色シルトで、炭化粒子を含み軟弱である。

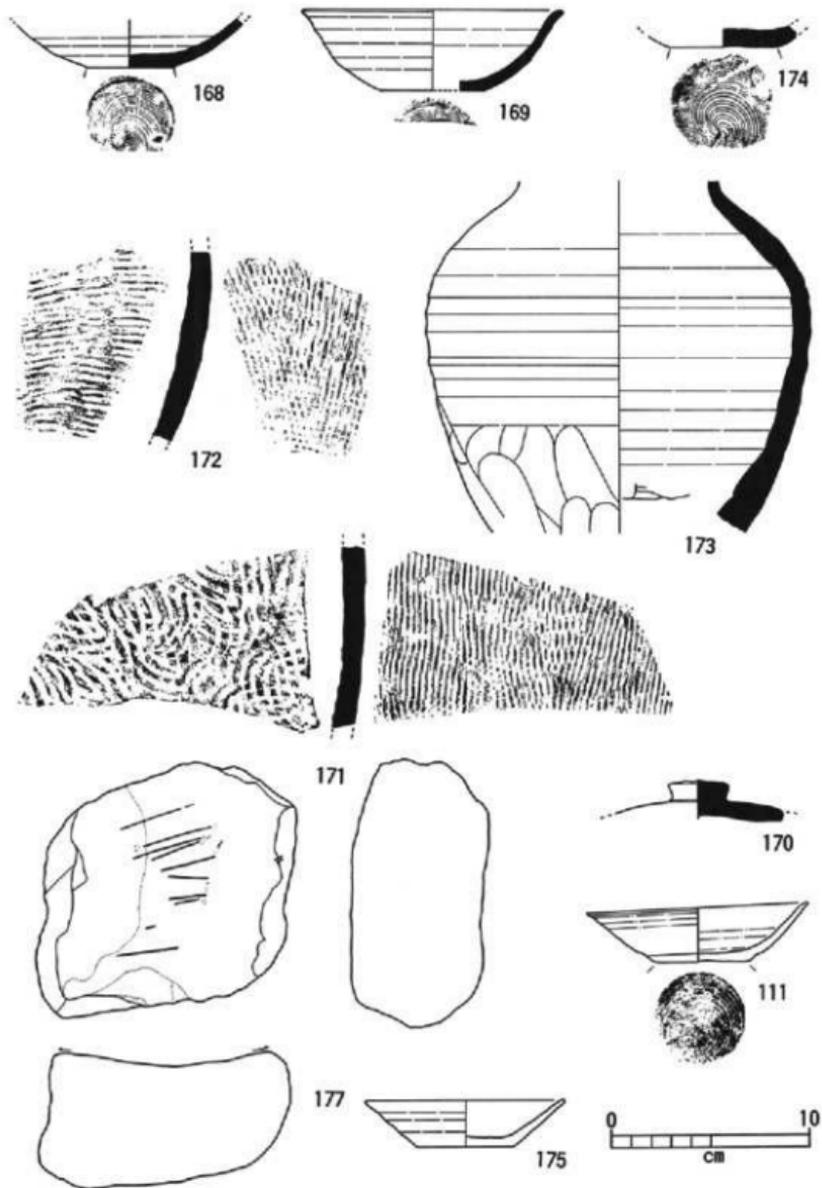
第24図173は須恵器壺の破片で、体部下半で底部に向かってへら削りが認められる。177は石製品で、長さ幅とも12cm、厚さ6.8cmを測る。材質は砂岩で、扁平な河原石の側辺を打ちかいて利用したものである。片面は研磨されたものらしく湾曲している。その裏面はかなりの凹凸を呈しており、全面にススが付着している。



第23図 SK27土壙跡

### SK27土壙跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	調整技法・備考	出土層位
			口径	底径	器高						
168	環	須恵器		44		灰色	良	良	回転糸切り		底面
169	環	須恵器	131	52	40	灰色	良	良	回転糸切り		2層
174	環	須恵器		50		灰白色	良	良	回転糸切り		2層
172	甕	須恵器				暗灰色	良	良			2層
173	壺	須恵器				暗灰色	良	良		体部下半へら削り	3層
171	甕	須恵器				灰色	良	良			2層
170	蓋	須恵器				灰色	良	良			1層
175	小皿	赤焼土器	100	48	24	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		1層
111	小皿	赤焼土器	110	46	30	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層



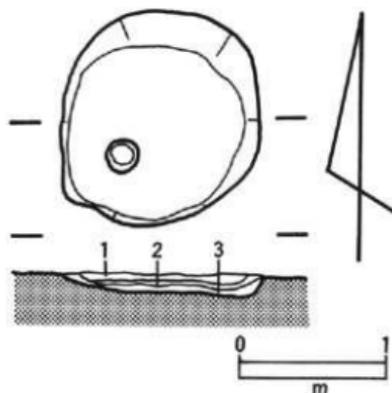
第24圖 SK27土壤跡出土土器・石製品

### SK63土墳跡

第Ⅲ層上面で検出した。長径156cm、短径134cm、深さ14cmを測る。平面形は不整の円形を呈する。底は全域が平坦である。

南辺にピットが1基検出されたが、本土墳との関係は未詳である。

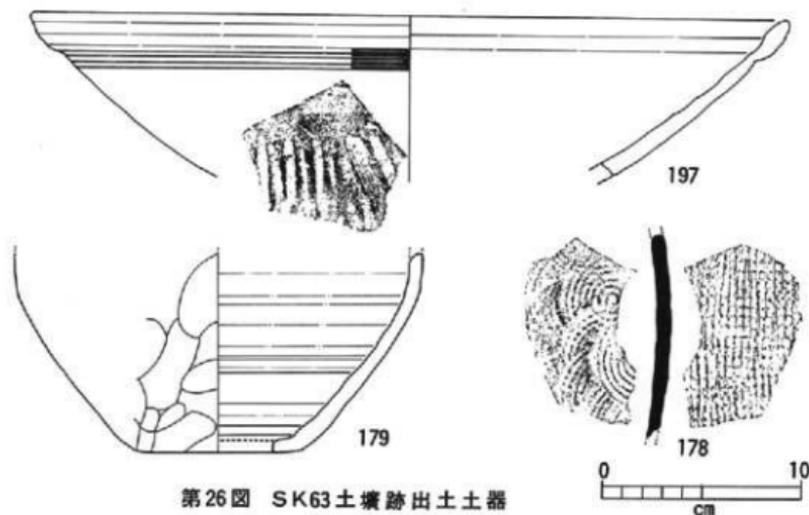
埋積土は3層に分けられた。1層は、黒色微砂質土に暗青灰色シルトが混じる。2層は、暗青灰色シルトと黒色微砂質土が、まだらに混じる。3層は、黒色微砂質土で多量の炭化粒子を含む。



第25図 SK63土墳跡

### SK63土墳跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法・備考	出土層位
			口径	底径	器高						
197	埴	赤焼土器	385			灰褐色	粗砂混	良		体部外面スス付着	1層
179	甕	赤焼土器		84		灰褐色	粗砂混	良		外面ヘラ削り	1層
178	甕	須恵器				暗青灰色	良	良		外面スス付着	1層



第26図 SK63土墳跡出土土器

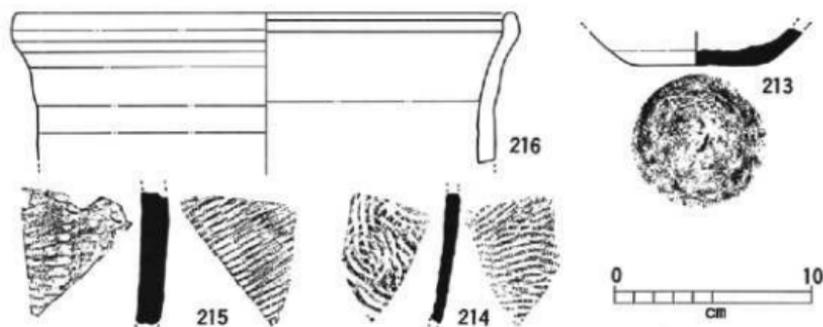
### SD40 溝跡

精査区中央、第Ⅲ層上面で検出した。南南西と東南東方向に伸び、「く」の字状に折れ曲がっている溝である。幅は上場で30～50cm、深さは4～11cmを測る。長さは南南西で8m、東南東で14mを測る。

埋積土は1層である。暗褐色微砂質土で炭化粒子を含み、しまっている。

### SD40 溝跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値 (%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法備考	出土層位
			口径	底径	器高						
216	甕	赤焼土器	232			灰褐色	粗砂混	良			1層
213	坏	須恵器		55		灰色	良	良	ヘラ切り		1層
215	甕	須恵器				灰色	良	良			1層
214	甕	須恵器				灰色	良	良			1層

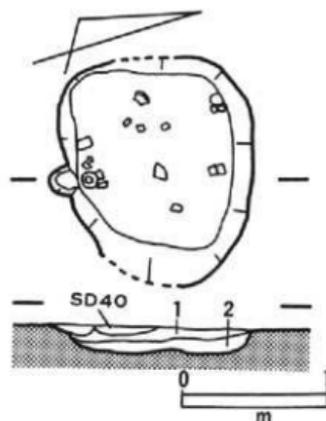


第27図 SD40 溝跡出土土器

### SK64 土壌跡

第Ⅲ層上面で検出した。SD40 溝跡に、中央を東西に切られている。長径140cm、短径126cm、深さ20cmを測る。平面形は不整の楕円形を呈する。底は平坦である。

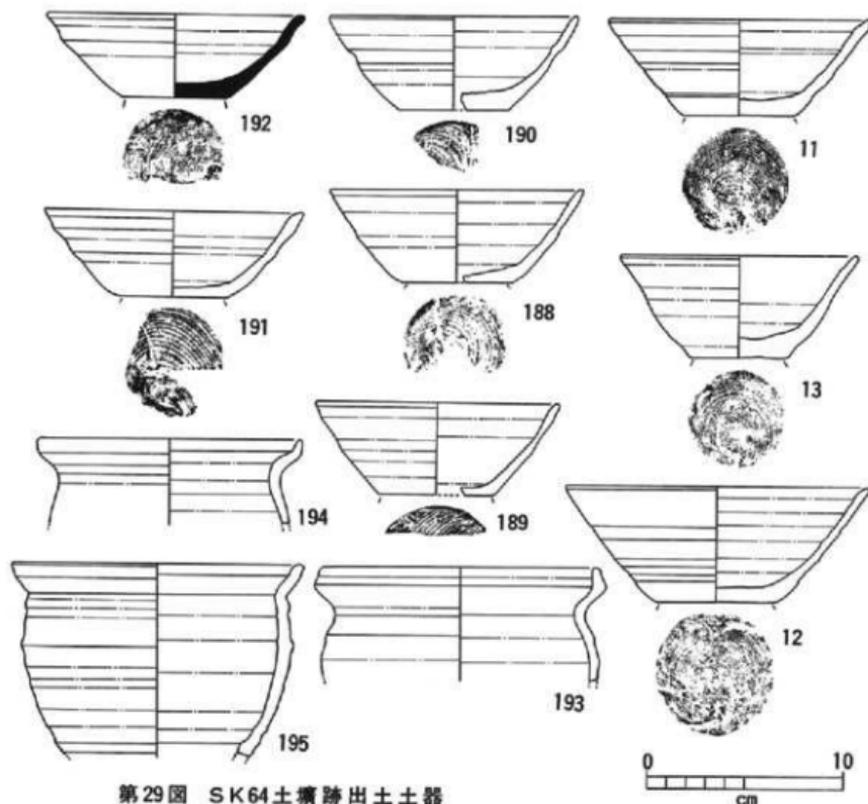
埋積土は2層に分けられた。1層は、暗青灰色シルトと黒色微砂質土がまだらに混じっている。2層は、黒色微砂質土で多量の炭化物を含んでいる。



第28図 SK64 土壌跡

## SK64土壌跡出土土器

遺物 番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	調整技法 備考	出土 層位
			口徑	底徑	器高						
192	坏	須恵器	128	50	43	青灰色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
190	坏	赤焼土器	124	55	43	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
11	坏	赤焼土器	130	54	49	茶褐色	良	良	回転糸切り		2層
191	坏	赤焼土器	130	54	45	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
188	坏	赤焼土器	127	53	48	赤褐色	良	良	回転糸切り	内外面スス附着	底面
13	坏	赤焼土器	119	50	53	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面スス附着	2層
189	坏	赤焼土器	122	59	47	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
12	坏	赤焼土器	153	60	60	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外面スス附着	底面
194	甗	赤焼土器	132			茶褐色	良	良		外面スス附着	底面
195	甗	赤焼土器	147			茶褐色	良	良		外面スス附着	2層
193	甗	赤焼土器	138			赤褐色	良	良		内外面スス附着	底面



第29図 SK64土壌跡出土土器

### SD67 溝跡

第Ⅲ層上面で検出した。SD45溝跡に東端を切られている。

幅は上場で30～46cm、深さ7～9cmを測る。長さは、残存している部分で140cmを測る。埋積土は1層で、暗褐色微砂質土で炭化粒子を含む。

### SD45 溝跡

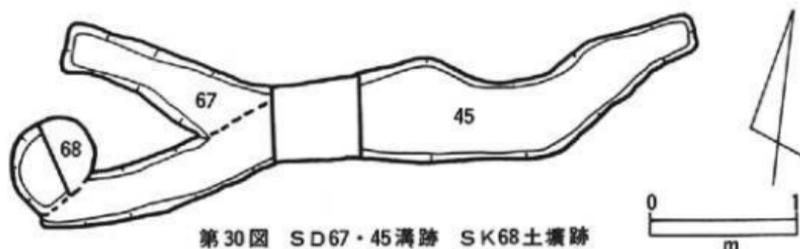
第Ⅲ層上面で検出した。SK68土壙に西端を切られている。

幅は上場で30～74cm、深さ6～9cmを測り、断面形はU字状を呈する。長さは残存している部分で460cmを測る。

埋積土は1層で、茶褐色微砂質土で炭化粒子を含んでいる。

### SK68土壙

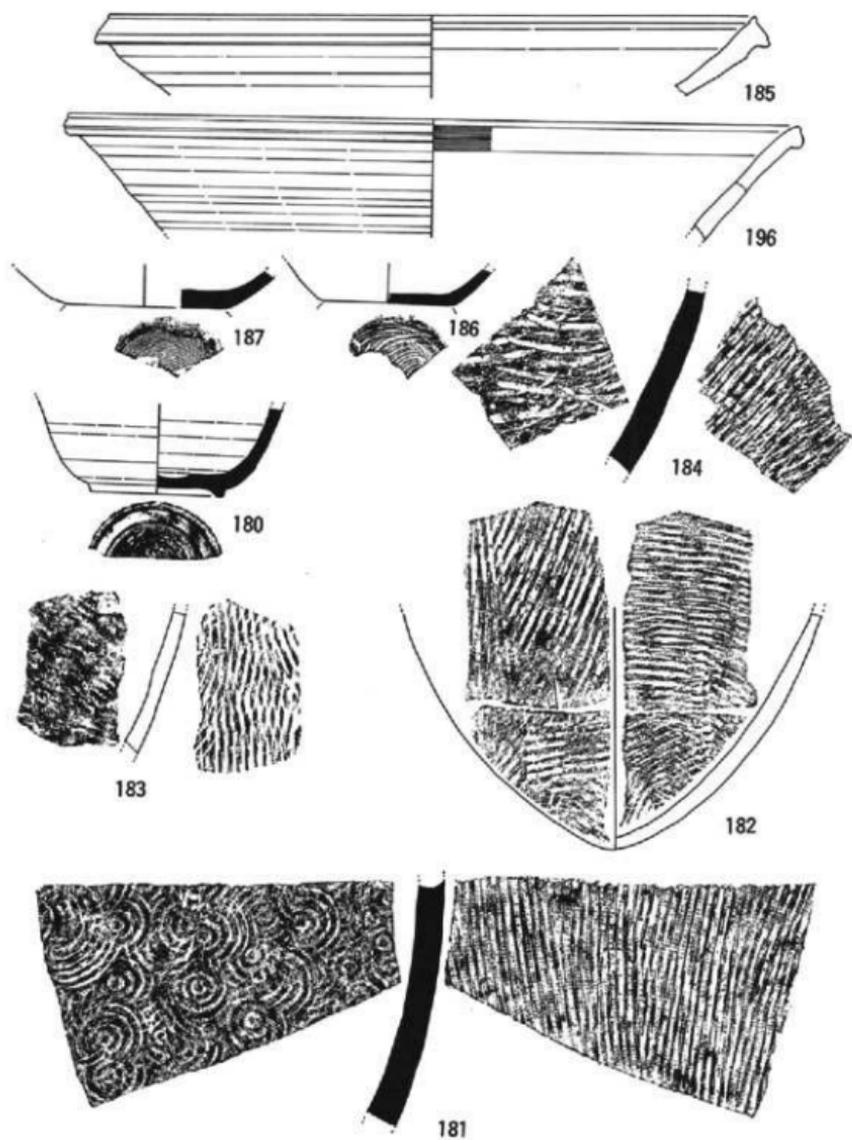
第Ⅲ層上面で検出した。長径74cm、短径55cm、深さ17cmを測る。平面形は南北に長い楕円形である。埋積土は1層で、黒褐色微砂質土で炭化粒子を含んでいる。



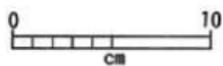
第30図 SD67・45溝跡 SK68土壙跡

### SD67・45溝跡、SK68土壙跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法備考	出土地点層位
			口径	底径	器高						
185	鍋	赤焼土器	328			赤褐色	良	良			SD67-1層
196	鍋	赤焼土器	374			灰白色	良	良		外面スス付着	SD67-1層
187	環	須恵器		80		灰褐色	良	良	回転未切り		SD67-1層
186	環	須恵器		66		灰白色	良	良	回転未切り		SD67-1層
184	甕	須恵器				暗青灰色	粗砂混	良			SD67-1層
180	高台環	須恵器		70		暗青灰色	粗砂混	良			SD45-1層
183	甕	赤焼土器				茶褐色	良	良		外面スス付着	SD45-1層
181	甕	須恵器				暗青灰色	粗砂混	良			SD45-1層
182	甕	赤焼土器				赤褐色	粗砂混	良		外面スス付着	SK68-1層



第31圖 SD67·45溝跡、SK68土壤跡出土土器

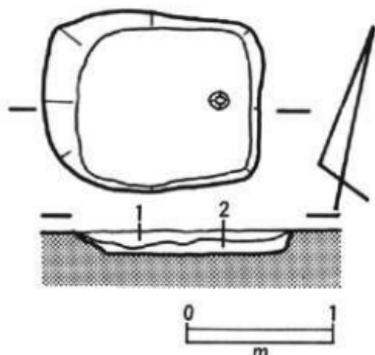


### SD135 溝跡

精査区東辺を南北に流れる溝である。調査期間の関係で、掘り下げは北側半分だけである。幅は上場で180～220cm、深さは30～40cmを測る。断面形は舟底状を呈する。

埋積土は2層に分けられた。1層は、茶褐色微砂質土と暗青灰色シルトがまだらに混じり、非常に軟質で粘性があり埋め土と考えられる。貝殻や草根類が出土している。2層は暗灰褐色の粗砂で、厚さは3cm内外を測る。近世の梁付などの陶磁器片が出土している。

本溝跡は、近世を下らない時期の所産であると考えられる。



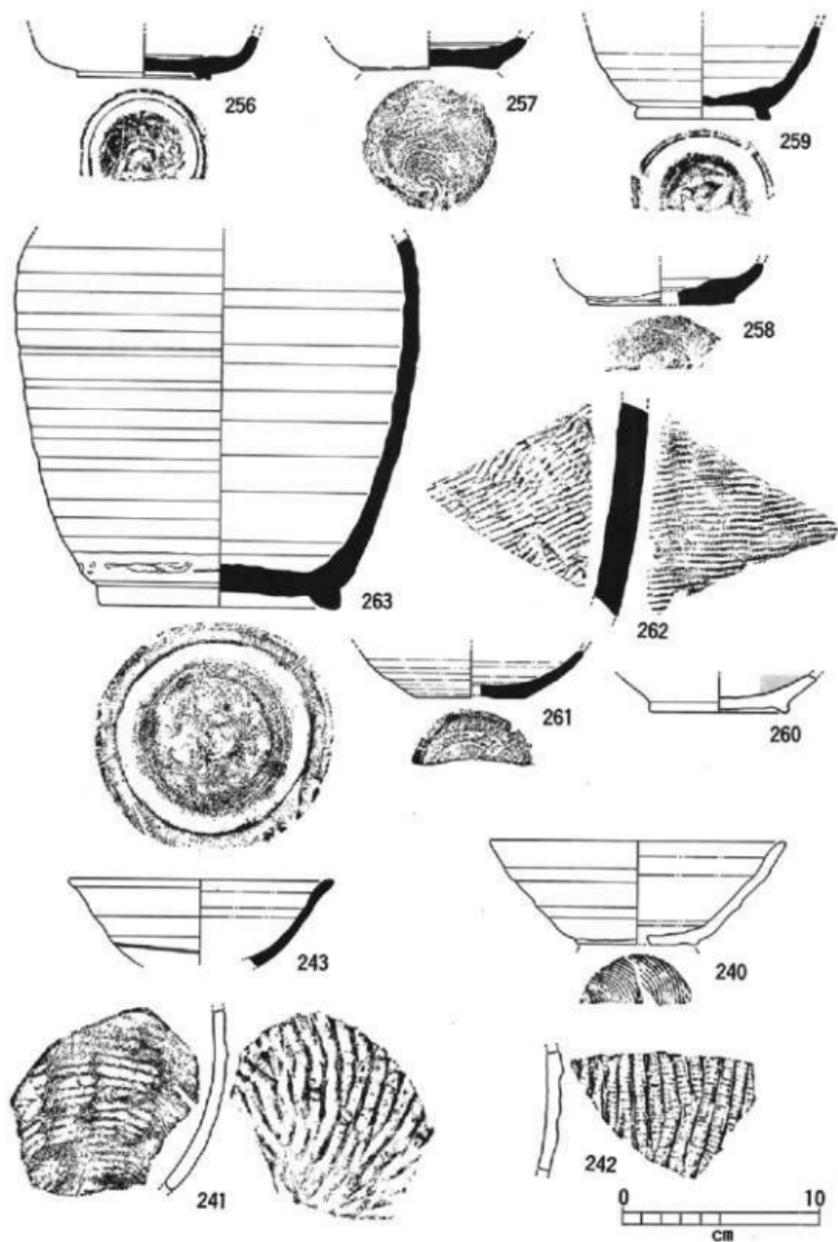
第32図 SK143土壌跡

### SK143土壌跡

第Ⅲ層上面で検出した。長さ148cm、幅124cm、深さ17cmを測る。平面形は隅が丸い矩形を呈する。底は全域にわたって平坦である。埋積土は2層に分けられた。1層は黒褐色シルトと青灰色シルトがまだらに混じり、炭化物を含み、しまっている。2層は暗青灰色微砂質土で、炭化粒子を含み軟質である。

### SD135溝跡・SK143土壌跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法備考	出土地点層位
			口径	底径	器高						
256	高台坏	須惠器		70		灰色	粗砂混	良			SD135-1層
257	坏	須惠器		70		灰白色	良	良	回転糸切り		SD135-1層
259	高台坏	須惠器		67		黒灰色	良	良			SD135-1層
258	坏	須惠器		75		灰色	少礫混	良			SD135-1層
263	壺	須惠器		98		暗灰色	良	良		明瞭なロクロ痕	SD135-1層
262	壺	須惠器				暗灰色	良	良			SD135-1層
261	坏	須惠器		55		灰白色	良	良	ヘラ切り		SD135-1層
260	高台坏	黒色土器		46		茶褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SD135-1層
243	坏	須惠器	132			青灰色	良	良	回転糸切り		SK143-1層
240	坏	赤焼土器	148	60	53	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK143-1層
241	壺	赤焼土器				赤褐色	良	良			SK143-1層
242	壺	赤焼土器				赤褐色	良	良		外面スス付着	SK143-1層



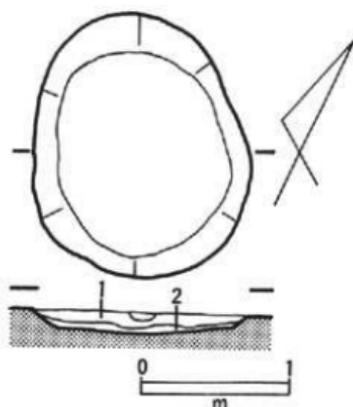
第33圖 SD135溝跡、SK143土壇跡出土土器

### SK145土壌跡

第Ⅲ層上面で検出した。長径180cm、短径150cm、深さ15cmを測る。平面形は楕円形を呈する。底は中央に向かってわずかに凹み、平坦である。

埋積土は2層に分けられた。1層は、暗褐色微砂質土と暗青灰色シルトがまだらに混じり、炭化粒子を含み硬くしまっている。2層は暗青灰色微砂質土で、炭化物を含み軟弱である。

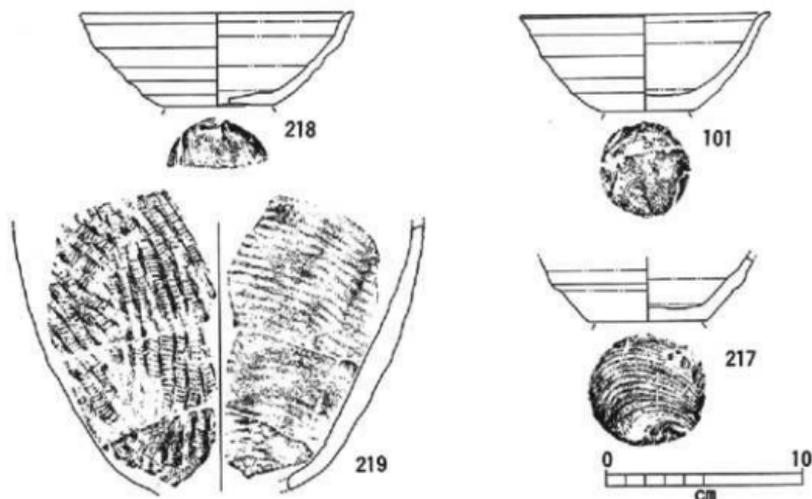
第35図219は赤焼土器製の破片で、底部形態は丸底と考えられる。



第34図 SK145土壌跡

### SK145土壌跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法・備考	出土層位
			口径	底径	器高						
218	坏	赤焼土器	137	55	47	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内外面スス付着	1層
101	坏	赤焼土器	125	47	49	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外面スス付着	1層
217	坏	赤焼土器		56		赤褐色	良	良	回転糸切り	外面スス付着	1層
219	甕	赤焼土器				赤褐色	良	良		内面スス付着・丸底	1層



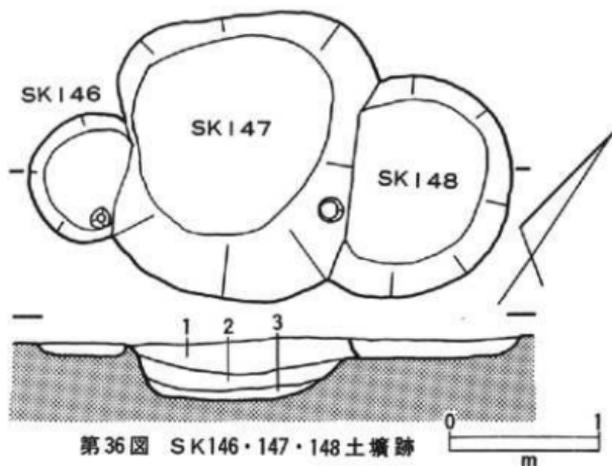
第35図 SK145土壌跡出土土器

### SK146土壙跡

直径80cm、深さ7cmを測る。SK147に東辺を切られている。

### SK147土壙跡

長さ200cm、幅170cm、深さ40cmを測る。平面形は隅が丸い矩形である。SK148に東辺を切られているが、出土した土器片が接合するものが何片もあった。埋



第36図 SK146・147・148土壙跡

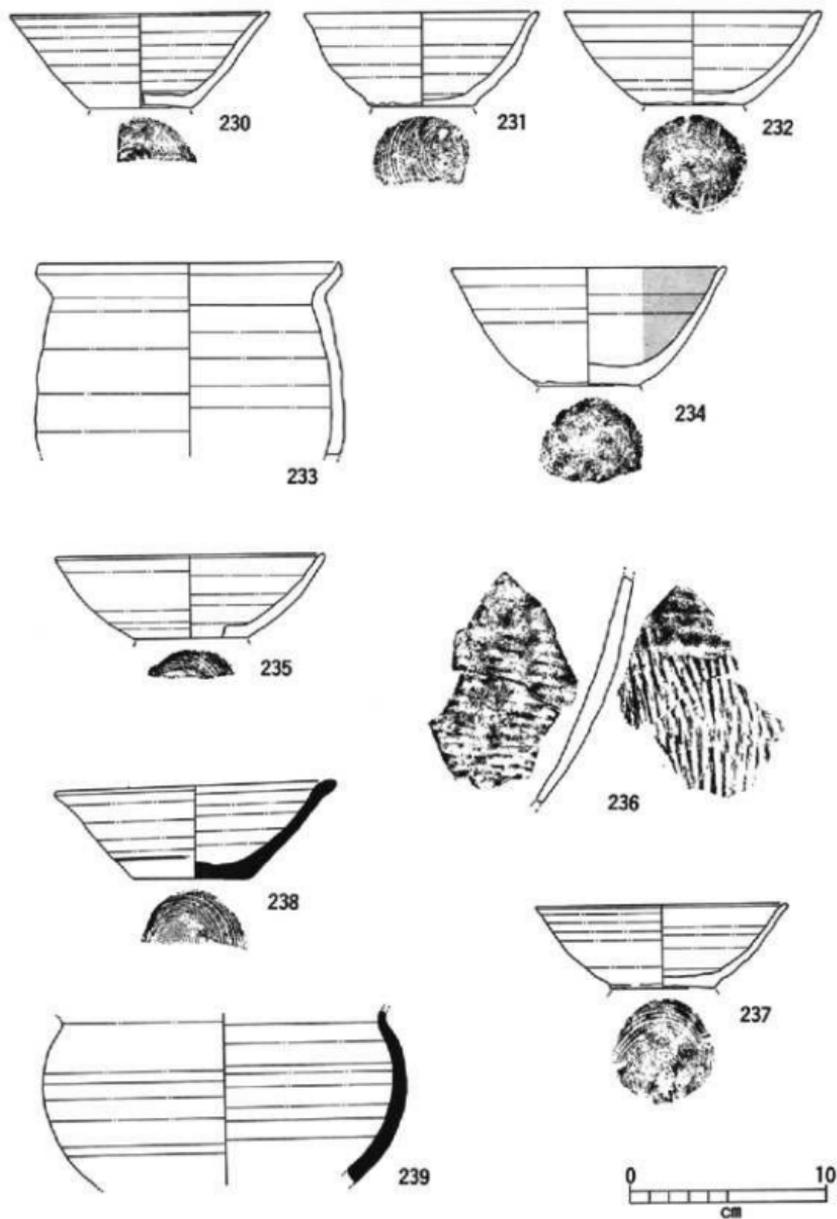
積土は3層に分けられた。1層は暗褐色微砂質土で、硬くしまっている。炭化粒子を含む灰が、下部にまだらに混じる。2層は暗青灰色微砂質土で、炭化粒子を含み軟質である。3層は茶褐色微砂質土で、炭化粒子を含み軟質である。炭化粒子を含む灰が、下部にまだらに混じる。

### SK148土壙跡

長径150cm、短径110cm、深さ16cmを測る。埋積土は1層で、黒褐色微砂質土で炭化粒子を含む。

### SK147・148土壙跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法備考	出土地点層位
			口径	底径	器高						
230	环	赤焼土器	130	50	47	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK147-1層
231	环	赤焼土器	118	52	47	赤褐色	良	良	回転糸切り	内外面スス付着	SK147-1層
232	环	赤焼土器	130	50	47	赤褐色	良	良	回転糸切り	外面スス付着	SK147-1層
233	甕	赤焼土器	152			灰赤褐色	粗砂混	良		口縁内面にスス	SK147-1層
234	环	黒色土器	137	52	60	灰赤褐色	良	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK147-1層
235	环	赤焼土器	135	57	42	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外面スス付着	SK148-1層
236	甕	赤焼土器				赤褐色	良	良		外面スス付着	SK148-1層
238	环	須恵器	140	58	50	灰白色	良	良	回転糸切り		SK <sub>146</sub> <sup>147</sup> -1層
239	壺	須恵器				黒灰色	良	良			SK <sub>146</sub> <sup>147</sup> -1層
237	环	赤焼土器	127	53	43	赤褐色	良	良	回転糸切り		SK <sub>146</sub> <sup>147</sup> -1層

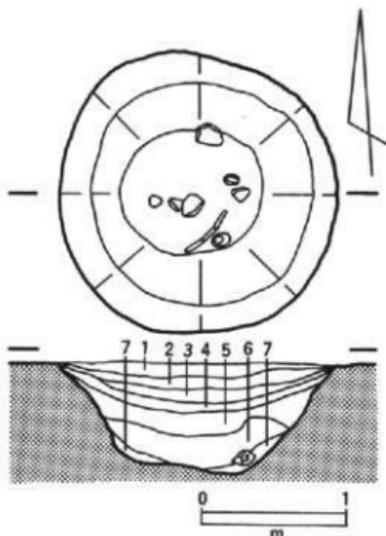


第37圖 SK147・148土坑跡出土土器

### SK152土壌跡

長径200cm、短径190cm、深さ74cmを測る。壁は急な傾斜で底に至る。底面は東方へ、ゆるやかに傾斜する。

埋積土は7層に分けられた。1層は、黒褐色微砂質土で炭化粒子を含む。2層は、黒褐色微砂質土と青灰色シルトがまだらに混じり炭化粒子を含む。3層は、黒褐色微砂質土と暗青灰色微砂質土がまだらに混じり炭化粒子を含む。4層は、黒褐色シルトと暗青灰色シルトがまだらに混じり炭化粒子を含む。3層より黒い。5層は、黒褐色シルトと暗青灰色シルトがまだらに混じり炭化粒子を含む。6層は、黒色微砂質土に暗青灰色シルトがブロック状に混じる。7層は、黒褐色シルトと暗青灰色シルトがまだらに混じり炭化粒子を含む。4～7層は軟質である。



第38図 SK152土壌跡

### SK152土壌跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法・備考	出土層位
			口径	底径	器高						
205	坏	須恵器	132	57	34	灰色	良	良	ヘラ切り		2層
204	坏	須恵器	125	65	35	灰色	良	良	回転糸切り		4層
206	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			4層
207	高台皿	赤焼土器	82	42	30	灰白色	良	良			5層
92	高台坏	黒色土器		72		赤褐色	良	良	回転糸切り	内面ミガキ	底面
208		製塩土器		89		茶褐色	粗砂混	可		体部内外面に巻上げ痕	5層
99	小皿	赤焼土器	89	42	20	灰白色	良	良	回転糸切り		5層

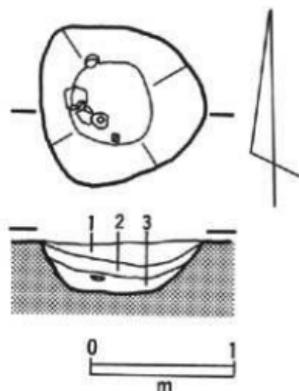


第39図 SK152土壌跡出土土器

### SK153土壙跡

精査区東南辺、第Ⅲ層上面で検出した。長径120cm、短径110cm、深さ34cmを測る。平面形は、東端が突き出した不整形を呈する。壁は、急な傾斜で底に至っている。底は平坦である。

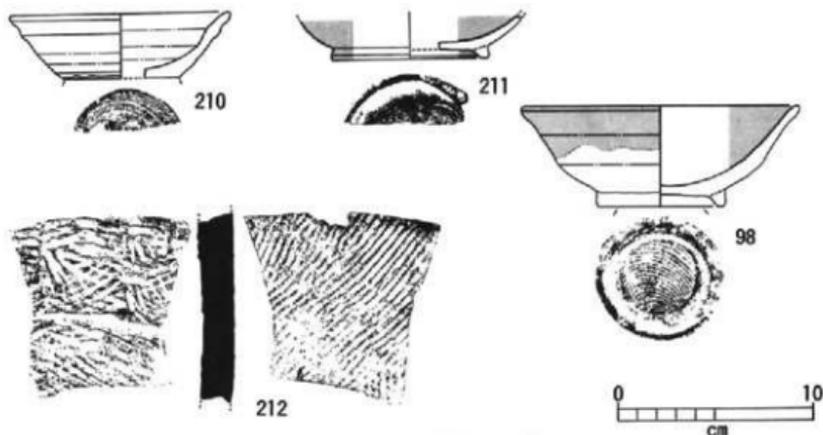
埋積土は3層に分けられ、各層ともレンズ状の堆積状態である。1層は、暗褐色微砂質土と黒色微砂質土がまだらに混じり、炭化粒子を含み軟質である。2層は、青灰色シルトと黒褐色シルトがしま状に混じり軟質である。3層は、黒褐色シルトと青灰色シルトがまだらに混じる。2層より青味が強い。



第40図 SK153土壙跡

### SK153土壙跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技	調整方法	出土層位
			口径	底径	器高						
210	坏	赤焼土器	110	59	33	茶褐色	粗砂混	良	回転糸切り		3層
211	高台坏	黒色土器		79		黒色	良	良		内面ミガキ	3層
98	高台坏	黒色土器	140	65	51	茶褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ	3層
212	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			1層



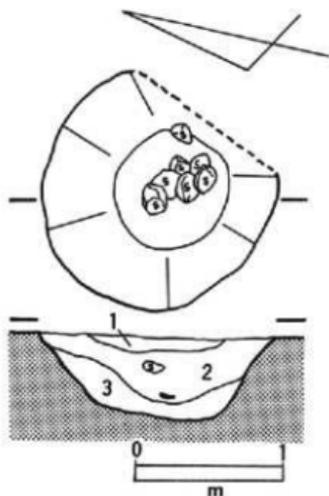
第41図 SK153土壙跡出土土器

### SK154土壌跡

第Ⅲ層上面で検出した。南東辺の一部を、SD135溝跡に切られている。

長径164cm、短径152cm、深さ54cmを測る。平面形は、不整の円形を呈する。底は南に向って、わずかに傾斜している。

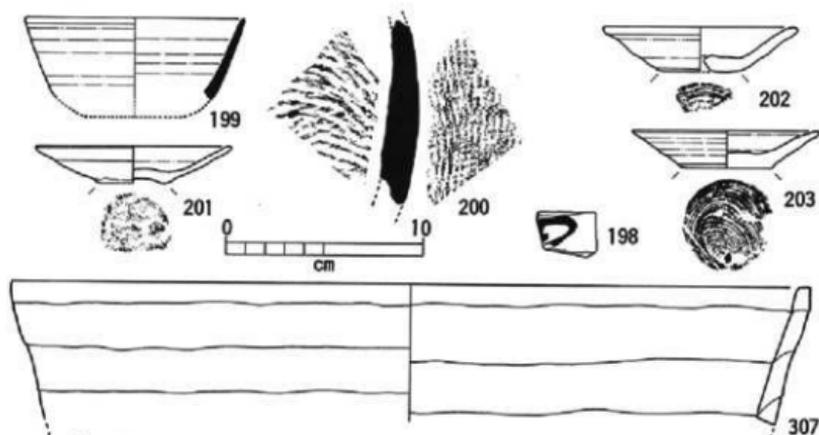
埋積土は3層に分けられた。1層は、黒褐色微砂質土で炭化粒子を含む。2層は、暗褐色シルトで軟弱である。この2層上位中央部で、直径10~20cmの礫が7個まとまった状態で出土した。3層は、暗褐色シルトと暗青灰色シルトがまだらに混じり、軟弱で粘性を有する。



第42図 SK154土壌跡

### SK154土壌跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法備考	出土層位
			口径	底径	器高						
199	環	須恵器	110			暗青灰色	粗砂混	良			3層
200	変	須恵器				灰色	良	良			2層
201	小皿	赤焼土器	100	35	19	灰白色	粗砂混	良	回転糸切り		3層
202	小皿	赤焼土器	98	40	22	灰色	良	良	回転糸切り		2層
203	小皿	赤焼土器	95	45	20	灰赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		2層
198		須恵器				灰色	良	良		体部外面に墨書	3層
307		製塩土器	(405)			暗赤褐色	粗砂混	可			2層



第43図 SK154土壌跡

### SK155土壙跡

土壙の中央を、幅40cmの暗渠が切っている。長径90cm、短径70cm、深さ10cmを測る。

### SK157土壙跡

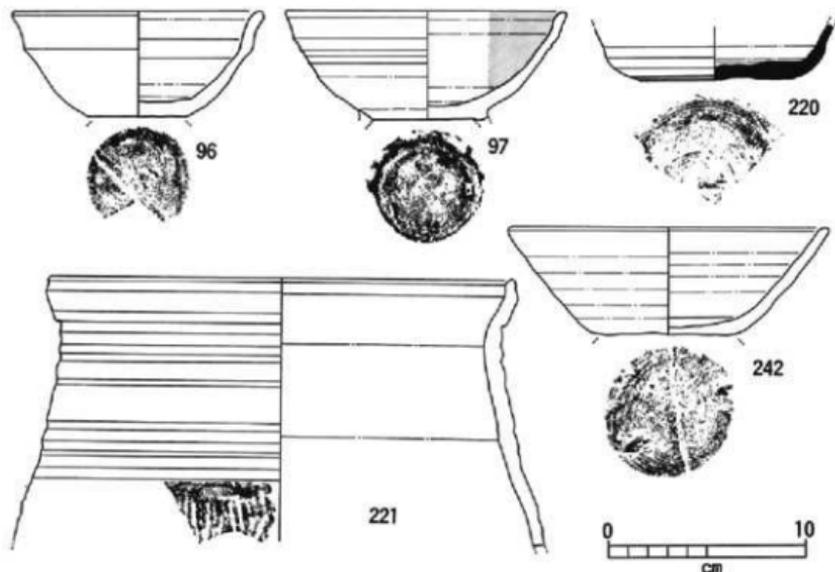
東辺の一部を排水溝に切られる。直径40cm、深さ9cmを測る。

### SK158土壙跡

長径130cm、短径110cm、深さ7cmを測る。平面形は楕円形を呈する。

### SK155・157・158土壙跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法備考	出土地点層位
			口径	底径	器高						
96	坏	赤焼土器	125	50	53	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK155-底面
97	高台坏	黒色土器	140	60	(55)	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK155-1層
220	坏	須恵器		80		灰白色	良	良	ヘラ切り		SK155-1層
221	甕	赤焼土器	233			赤褐色	良	良		内面スス付着	SK155-1層
242	坏	赤焼土器	164	70	55	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK155-1層



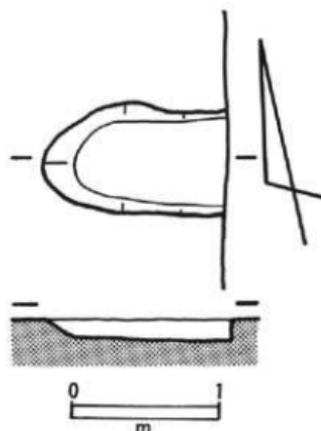
第44図 SK155・157・158土壙跡出土土器

### SK159土壙跡

東辺をSD135溝跡に切られている。東西の残存長は125cm、南北長は70cm、深さ14cmを測る。底面は平坦である。

埋積土は1層で、茶褐色微砂質土と青灰色シルトと灰がまだらに混じり、炭化粒子を含んでいる。

本土壌から赤焼土器環や黒色土器高台付環などの一部破損したものが、投棄された状態で出土している。



第45図 SK159土壙跡

### SK160土壙跡

長径62cm、短径56cm、深さ6cmの浅い土壙である。

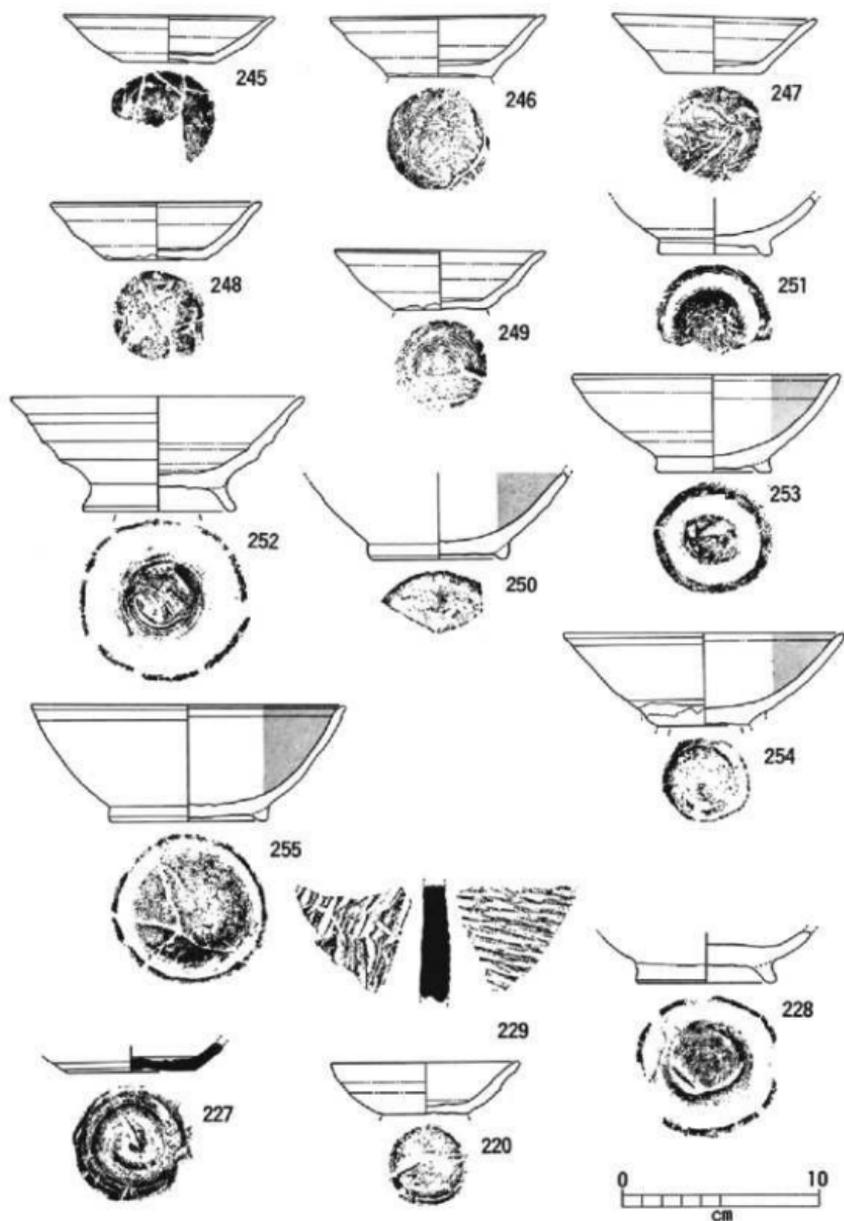
### SK161土壙跡

調査期間の関係で南側半分は未調査である。セクションで確認できた長さは370cmである。埋積土は

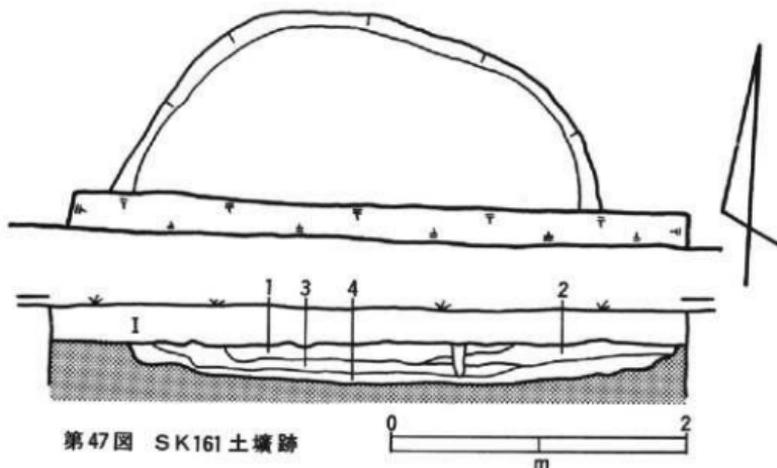
4層に分けられた。1層は、黒褐色微砂質土で炭化粒子を多量に含む。2層は、暗褐色シルトと暗青灰色シルトがまだらに混じり炭化粒子を含む。3層は暗茶褐色シルトで、炭化粒子を含み軟質である。4層は暗青灰色シルトで、炭化粒子を含み軟質である。

### SK159・160土壙跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法備考	出土地点層位
			口径	底径	器高						
245	小皿	赤焼土器	105	45	24	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK159-1層
246	小皿	赤焼土器	110	55	31	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	底部スス付着	SK159-底面
247	小皿	赤焼土器	103	48	31	灰白色	粗砂混	可	回転糸切り		SK159-1層
248	小皿	赤焼土器	106	48	30	灰白色	粗砂混	可	回転糸切り		SK159-1層
249	小皿	赤焼土器	105	47	32	灰白色	粗砂混	可	回転糸切り		SK159-底面
251	高台環	赤焼土器		40		灰白色	良	良			SK159-底面
252	高台環	赤焼土器	147	50	58	暗茶褐色	良	良	回転糸切り	内外面スス付着	SK159-底面
250	高台環	黒色土器		54		灰白色	粗砂混	可		内面ミガキ	SK159-底面
253	高台環	黒色土器	135	40	50	灰白色	粗砂混	良		内面ミガキ	SK159-底面
255	高台環	黒色土器	157	62	59	赤褐色	粗砂混	良		内面ミガキ	SK159-底面
254	高台環	黒色土器	142	40	(47)	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ	SK159-底面
229	甕	須恵器				灰色	良	良			SK160-1層
228	甕	赤焼土器			48	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK160-1層
227	環	須恵器		60		灰色	良	良	ヘラ切り		SK160-1層
220	小皿	赤焼土器	95	40	26	赤褐色	良	良	回転糸切り		SK160-1層



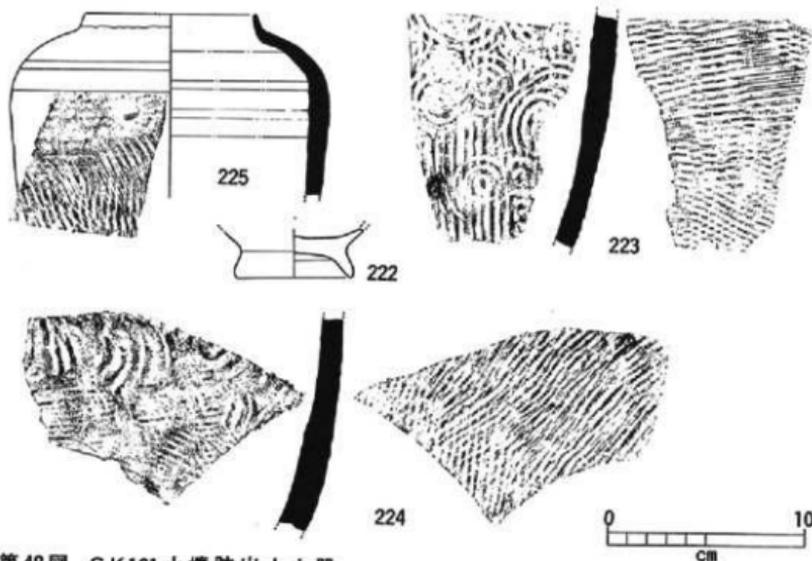
第46圖 SK159・160土坑跡出土土器



第47図 SK161土坑跡

SK161土坑跡出土土器

遺物番号	器形	種別	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し技法	調整技法考	出土層位
			口径	底径	器高						
225	壺	須恵器	85			暗灰色	良	良			1層
223	甕	須恵器				黒灰色	良	良			1層
222		赤焼土器		40		赤褐色	粗砂混	良			1層
224	甕	須恵器				暗青灰色	良	良			1層



第48図 SK161土坑跡出土土器

### SB58建物跡

第Ⅲ層上面で、掘り方EB46～57を検出した。掘立柱の建物跡である。建物は桁行3間、梁行2間の南北棟で、桁行方向は中央の柱列で真北より東へ2°偏る。掘り方は直径25～70cmの楕円形、又は不整形である。柱痕は直径12～35cmの円形、又は楕円形で深さは16～40cmを測る。掘り方の埋め土は、暗青灰色微砂質土で炭化粒子を含む。柱間寸法は夫々心々で、桁行が2.3～2.8cm、梁行が2.05～2.4mを測る。桁行全長は東辺から7m、7.6m、7.5mとなり、梁行全長は南辺から4.5m、4.4m、4.4m、4.3mとなる。

### SB110建物跡

第Ⅲ層上面で、掘り方EB111～122を検出した。掘立柱の建物跡である。桁行3間、梁行2間の東西棟で、桁行方向は真東を向く。掘り方は、直径24～38cmの円形である。柱痕は直径15～24cmの円形で、深さは16～38cmを測る。掘り方の埋め土は、暗青灰色微砂質土で炭化粒子を含む。柱間寸法は夫々心々で、桁行が2.1～2.45m、梁行が2.4～2.5mを測る。桁行全長は南辺から6.75m、6.9m、6.6mとなり、梁行全長は西辺から4.8m、5m、4.9m、4.8mとなる。本建物跡にはSK143土壌が中央南辺にあるが、関係は未詳である。



第49図 SB58・110建物跡

各遺構内土器片出土点数表

種 別 遺 構	赤焼土器	黒色土器	須 恵 器	陶 磁 器	計
S D 1 溝 跡	207	5	35		247
S K 2 土 壇 跡	148	4	7		159
S K 3 土 壇 跡	535	25	91		651
S K 4 土 壇 跡	12				12
S K 6 土 壇 跡	5	2			7
S K 7 土 壇 跡	107	4	28		139
S K 8 土 壇 跡	141	4	43		188
S D 25 溝 跡	176	2	23	3	204
S K 26 土 壇 跡	1,117	42	174	2	1,335
S K 27 土 壇 跡	94	8	60	1	163
S D 40 溝 跡	190	8	27		225
S D 45 溝 跡	37	1	12		50
S K 63 土 壇 跡	61	5	12		78
S K 64 土 壇 跡	156	8	2		166
S D 67 溝 跡	51	4	13		68
S K 68 土 壇 跡	21				21
S D 135 溝 跡	76	2	45	1	124
S K 143 土 壇 跡	146	2	6		154
S K 145 土 壇 跡	76		3		79
S K 146 土 壇 跡	1		2		3
S K 147 土 壇 跡	115	7	8		130
S K 148 土 壇 跡	192		9		201
S K 150 土 壇 跡	21	2	3		26
S K 151 土 壇 跡	77	14	11	1	103
S K 152 土 壇 跡	136	35	37		208
S K 153 土 壇 跡	13	2	3		18
S K 154 土 壇 跡	61		15 15		76
S K 155 土 壇 跡	37	16			53
S K 158 土 壇 跡	33				33
S K 159 土 壇 跡	81	15			96
S K 160 土 壇 跡	18		3		21
S K 161 土 壇 跡	12	2	8		22

出土土器片数表

種別 出土地点	赤焼土器 (%)	黒色土器 (%)	須恵器 (%)	陶磁器 (%)	計
試掘域内	1,558 (71.4)	45 (2.1)	569 (26.1)	9 (0.4)	2,181
精査区内	7,023 (74.8)	334 (3.6)	2,025 (21.5)	12 (0.1)	9,394
遺構内	4,960 (82.0)	261 (4.3)	823 (13.6)	7 (0.1)	6,051
計	13,541 (76.8)	640 (3.63)	3,417 (19.4)	28 (0.2)	17,626

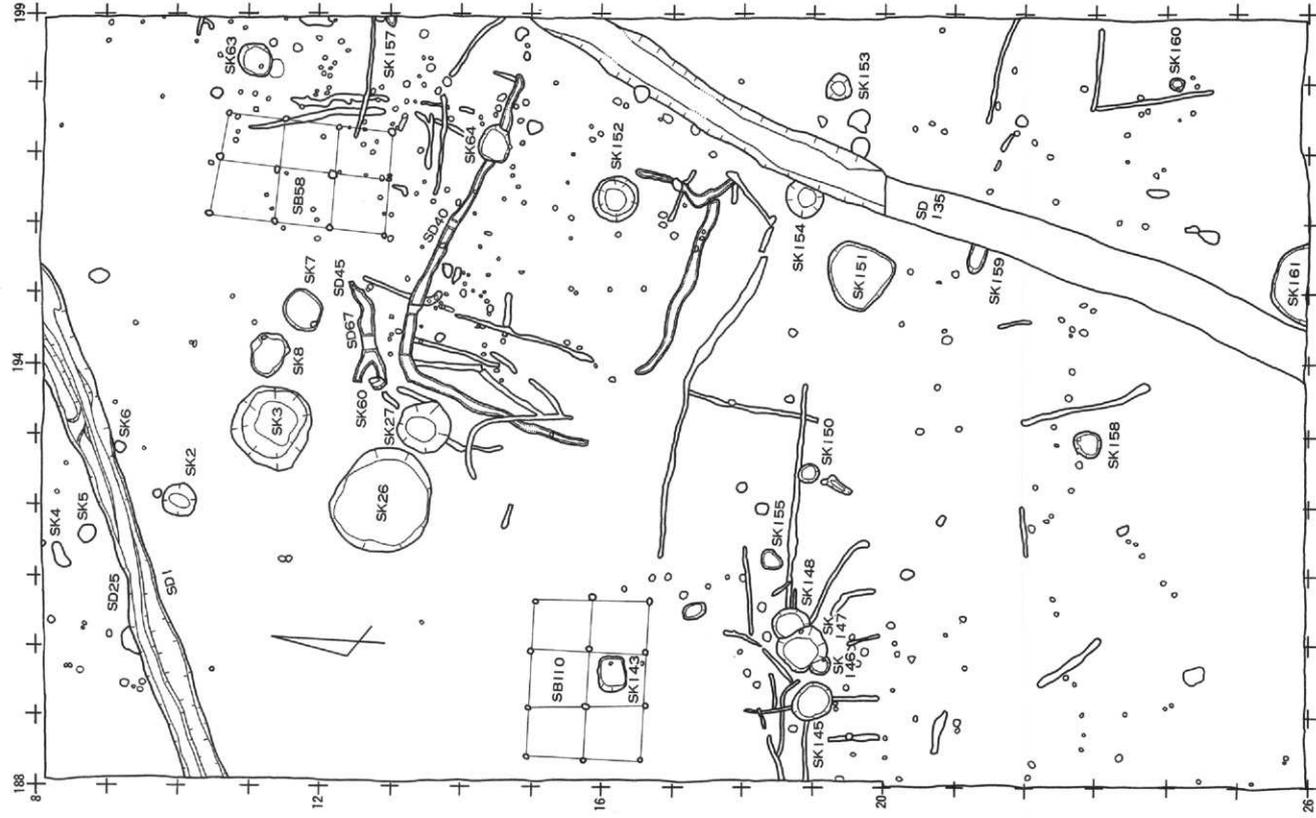
境興野遺跡周辺の主要遺跡一覧表（第52図参照）

No	遺跡名	所在地	種別	主要文献
1	塚田	遊佐町・小松	集落跡	・県教委「現地説明会資料」1980
2	地正面	遊佐町・下小松	集落跡	・県教委「現地説明会資料」1977, 78
3	若王寺	酒田市・豊川	集落跡	・県教委報告書第32集 1980
4	明成寺	酒田市・豊川	集落跡	・佐藤禎宏「酒田市明成寺遺跡」『庄内考古学11』1972 ・県教委報告書第32集 1980
5	城輪櫓	酒田市・城輪	官衙跡	・酒田市教委「史跡城輪櫓跡」各年度調査概要 ・柏倉亮吉・小野忍「城輪櫓遺跡の内郭と性格について」山形県民俗歴史論史2 1978
6	茅針谷地	八幡町・法連寺	集落跡	・阿部正己「市条村の遺跡・遺物」1925 ・県教委報告書第49集 1981
7	新田目城	酒田市・本楯	城館跡	・阿部正己「城輪の出羽櫓址及び国分寺址調査」郷土研究業書2 1932
8	堂の前	八幡町・法連寺	寺院跡?	・県教委報告書第5, 7, 10, 30集 1975~80 ・阿部義平「古代出羽国の発掘調査一堂の前遺跡とその周辺」日本歴史363 1978

No	遺跡名	所在地	種別	主要文献
9	後田	八幡町・政所	官衙跡	・県教委「現説資料」1980
10	榑掛	八幡町・岡島田	集落跡	
11	上ノ田	酒田市・境興野	集落跡	・県教委「現説資料」1979, 80
12	北田	酒田市・関	集落跡	・県教委報告書第48集 1981
13	関 B	酒田市・関	集落跡	・県教委報告書第47集 1981
14	高阿弥陀	酒田市・横代	寺院跡	・喜田貞吉「山形県本橋発見の榑に就いて―出羽榑跡か国分寺址か―」歴史地理58の1 1931
15	横代	酒田市・横代	集落跡	
16	大槻新田	酒田市・大槻新田	集落跡	
17	郡山	平田町・郡山	官衙跡	
18	八森	八幡町・市条	官衙跡	・八幡町報告書 1978 ・佐藤禎宏「仁和三年条の国府移転に関する覚書」庄内考古学16 1979
19	天狗森・唐戸岩	遊佐町・蔵岡	古窯跡	
20	小平	八幡町・小平	古窯跡	
21	願瀬	酒田市・願瀬	古窯跡	・佐藤禎宏・佐藤潤子「酒田市願瀬山第4号古窯跡」山形史学研究7 1971 ・川崎利夫「酒田市願瀬山1号窯の須恵器」さあべい3/2 1979
22	泉谷地	酒田市・生石	古窯跡	
23	山谷新田・新山	平田町・榑橋・山谷新田	古窯跡	

※ 県教委報告書は山形県教育委員会「山形県埋蔵文化財調査報告書」の略である。

※ 城輪榑遺跡関係の文献は多数あり、小野忍「城輪榑遺跡関係文献目録(1)」、「庄内考古学」第17号を参照されたい。



第50图 遺構配置図

## 2. 遺物

本遺跡から出土した遺物は17,000点余であるが、大部分は土器である。他に灰釉陶器片、銅鏡片、木片等も出土している。土器のなかでは赤焼土器が77%を占め、本遺跡出土遺物の主体をなし、ついで須恵器が約20%を占める。他に黒色土器、流れこみにより後世混入した陶磁器がある。なお特筆すべきことは約200片の製塩土器が出土したことで、県内では温海町米ヶ岡遺跡について発掘資料としては2番目である。

### (1) 須恵器

底部の切り離しが、糸切りによる環がもっとも多い。稀に篋切りによるものもあり、SK7土壌跡からは赤焼土器、糸切りの須恵環、篋切りの須恵環が共伴して出土している。環は器高が4cm前後、口径が12~13cmの比較的少量の小さいものが多い。高台付環もあるが、すべて付高台である。他に蓋、碗、高台付碗などもある。

大型品は完形のものがないが、長頸瓶や広口壺などは底部に近いところに篋削りが施されている。甕などの大型のものは表面に叩き目があり、内面には同心円、又は青海波状、平行条の叩き目がみられ、底部に近いところにカキ目が認められるものもある。蓋は通常のボタン状つまみが付き、天井部に回転篋削りが施されている。

### (2) 赤焼土器

本遺跡出土の土器の中で主体をなすものである。環、高台環、高台付皿、小皿類、甕、鍋、壺、羽釜などの器種があり、環と小皿類がもっとも多い。赤褐色、茶褐色、黒褐色などを呈し、二次調整はほとんど行われていないが、甕や壺においては胴下半に縦位の篋削りが施されている。環は口径13cm前後、底径5cm前後、高さ4.5~5cmのものが多く比較的小形である。

本遺跡でもっとも特徴的なのは、小皿類の出土である。すべて身が浅く、口径は7~8cmから10cmに満たず、高さも2cm前後のものが多く、底部は水挽きによる切り離しで糸切り痕が残る。高台のない皿様のもの、底を肥厚させて台状のものを形成しているもの、高台付のものなどに分類することができる。煤や油煙様の付着がみられるものもあり、燈明皿などに用いられたものもあったと思われる。

甕は、さして大きくなく口縁部に特徴がみられる。即ち「く」の字状に屈曲して口唇部が上方へわずかに伸びるのである。胴部下半には篋削りが施される。また須恵器と同じ叩き目があり、底部が丸底を呈する、やや細長い甕もある。

鍋は、一個体のものがSK26土壌跡より出土している。口縁部が丸みをもって外側に張り出して立ち上がり、底部は急な湾曲をえがく丸底である。体部外面には格子目状の叩き目がみられ、内面には円形のアテ痕が残り、外面に部分的に篋削りが施されている。底

部には黒い煤様のものが付着している。埴は本遺跡より少くとも8個体（破片より推定するに）出土しているが、甗などが全く出土していないところをみると埴で穀類を煮たものと思われる。他に炊飯具として、羽釜の破片が1片出土している。

### (3) 黒色土器

これまで土師器と呼ばれたり、内黒土器といわれてきたものがこの類である。器種は坏と高台付坏、皿などに限定されるが、坏がもっとも多い。比較的体量が大きく、内面は篋みがきの後、黒色処理され精細なものが多い。内外ともに黒色のものもあるが、きわめて少量である。本土器片は、全体の4%足らずである。

### (4) 製塩土器

きわめて粗製でロクロの使用は認められず、輪積み法により手づくねでつくられている。円筒形の単純な器形で、高さ20~30cm、口径20~40cm程度である。胎土には粗砂粒が混じり暗褐色や赤褐色を呈し、強い火熱を受けた様子がわかり脆い。体部には、明瞭に輪積みの痕跡が幅2cm程度に残っている。口縁部は厚さを減じてまるくおさまるものや、平らに切ったものもある。厚さは1cmほどである。内面には篋で整形した痕跡が認められる。

### (5) 灰釉陶器（白塗）

猿投竈産と思われる手付瓶破片が2個出土している。1つは口縁部で、もう1つは底部であるが同一個体である。ほぼ全面に淡緑色の灰釉が施され、高さは推定で22cm、口径8.3cm、底径12.6cmほどである。把手は口頸部にわずかに痕跡を残すが、口縁がつよく外反し肩がふくらんで底部に至り、ややすぼまる徳利形である。断面が、かまぼこ形を呈する把手や、全体の形からして10世紀後半代のもと思われる。底部の周りや底面は回転篋削りが施され、きわめて丁寧なつくりで、胎土も精選された粒子の細かい良質の粘土を使用している。

### (6) その他の遺物

第三層上面より銅鏡片を採集した。「瑞花鳳凰八稜鏡」と推定される。外区に花片が観察され、内区に瑞花がみられる。径12cmほどと思われ、12世紀の和鏡全盛期以前のもので10世紀後半から11世紀にかけてのもと思われる、遺跡の年代とも一致する。

木片は、厚板に方形の穴を穿ったものや曲物断片、漆塗りの段皿などが出土している。他に、くすんだ黄緑色の青磁小片が出土している。

以上、本遺跡から出土した遺物について述べたが、灰釉陶器や銅鏡片などはよく時代を示し、もっとも古い遺物は10世紀前半に遡るものも少量存するが、おおむね10世紀後半より11世紀にかけての遺物が主体をなしている。

## Ⅳ ま と め

本境興野遺跡では約1,800㎡を発掘調査して、掘立柱建物跡2棟、土壇28基、溝跡、ピットなど120あまりの遺構が検出された。遺物も須恵器、赤焼土器、黒色土器など17,626点の土器片をはじめ、鏡片、灰釉陶器片、製塩土器片などが出土している。土器のなかで、完形もしくは完形に近いものは126点である。土器のセット関係、瑞花鳳凰八稜鏡、猿投窯の灰釉陶器などの存在から総合的に推測して集落の成立は10世紀の初頭に置かれるにしても、10世紀後半より11世紀に及ぶ遺物が主体である。

しかも日常生活什器が主体を占め、3間×2間の掘立柱住居の存在や、ごみ捨てに利用された土壇より考えて、一般の農民の村落の一部であったと考えられるであろう。本集落の位置づけ並びに出土遺物の77%近くを占める赤焼土器について、調査団の考察を附記してまとめとしたい。

### (1) 城輪柵周辺における本遺跡の位置づけについて

本遺跡より検出された掘立柱建物跡は、3間×2間の南北棟と東西棟である。柱間は約8尺で、柱の太さはせいぜい3寸程度の円柱で、掘り方も24~70cmぐらいである。これと同じ規模や、これよりも若干小規模な建物跡は茅針谷地遺跡(1)、北田・関B遺跡(2)などでも検出されている。本遺跡のSB110の建物跡の中央南寄りにSK143土壇とした148×124cm、深さ17cmの浅いくぼみがあり、埋積土からは焼成炭化物などが出土しており、住居内部のかまど、又は厨房として用いられた場所であったとも考えられる。

寄棟式で草葺きの、このような住居がそれぞれかなりの隔りをおきながら点在し、その間を狭い通路がめぐり廻々に排水用の溝が通り、背の低い樹木がまわりに植えてあった情景が想像される。そして、数軒で井戸を共有するという関係は他の遺跡から類推されるところであり、これが村落における一つの共同体を形づくっていたのであろう。当時の村落は一つの共同体によって成り立っている場合もあるし、それらがいくつか集って形成される場合もあることは、それぞれ遺物の散布範囲をとらえて、集落には大小があると考えられることから容易に推測されるところである。

ところで、たった2棟の例では不十分であるが、それぞれの住居の方位がほぼ東西か南北に向くことは重要である。これは、つまり道路が東西南北の方格に従って設けられていることを示している。本遺跡の2.2km北は、出羽国府とされている城輪柵外郭線に突きあたる。9世紀初頭にここに国府庁が置かれるや、かなり大規模な都市づくりを実施した形跡がある(3)。まず諸河川の統御から始まり、地形の高低をなくして平坦にならし、条里の方格にしたがって道路を設け、いくつか区切った中に集落と耕地を位置づけていった。

城輪遺跡周辺の諸集落が多くは9世紀に、まさに突如として出現し12世紀までにはほとんどの遺跡が廃絶したことは、律令制国家による強力な規制のもと計画的な集落が形成されたことを裏書きする。その地割については古地名に条名や坪名を残すものもあり、部分的に古道が現集落に残されていると推定されるものもあるが、具体的地割りについてはまだ提示できる段階ではない。

本遺跡も国府周辺の方格地割に位置づけられる集落跡と考えられ、その近傍に延長年間(923~931)に信濃に勧請したと伝えられる諏訪神社や、伊勢国など中部地方に多い都波岐神社が存在することは、正史に見える拓殖移民の後裔によって営まれた集落の可能性もあり得ることである。

さらに本遺跡の南には、北田、関B、高阿弥陀、横代、大槻新田、桜林興野、郡山、桜林、天神堂とほぼ一直線上に平安時代の遺跡が連続し、平田町砂越・飛鳥のあたりに伸びる。飛鳥のあたりには古社飛鳥神社があり、出羽国最後の延専式水駅「鮎海駅」(4)とも推定される場所である。またその北の郡山は鮎海郡衙跡と推定され、現集落東南の畑地になっている低台地がその遺跡と考えられる。つまり、これらの遺跡の分布を見るに「鮎海駅」より「鮎海郡衙」を通り、酒田市城輪に所在する出羽国府からさらに北上して「遊佐駅」にいたる幹線道路があったものと考えられるのである。八幡町寺田の西の水田地帯に「大道東」なる地名があることも、そのことを暗示する。本遺跡から北へ城輪に至る間にも直線上に遺跡が点在し、さらに日向川を越え遊佐町へ入っても遺跡はほぼ直線状に伸びるようである。本遺跡も、この古代の主要幹線に沿った集落であったと考えられる。

なお本遺跡から、製塩土器が出土していることも注目に値する事実である。ここの集落で、海水を汲んできて塩焼きをやっていたのである。庄内地方で製塩土器は、温海町嵐ヶ関、鶴岡市由良の2箇所から出土しているが、何れも海岸地帯である。本遺跡は、現海岸線より東へ10kmほどの距離がある。

そこで想起されるのは「三代実録」仁和3(887)年5月20条である。つまり嘉祥3(850)年の地震により地形が改変し、国府が被害を受けたので最上郡保土土野に移したいという出羽守坂上茂樹の奏上である。この移転計画は認められず近くの高嶺の地が選ばれたが、国府移転の直接の原因は37年前の地震によるよりも、海進によって国府の近くまで海水がみなぎり海が迫ってきたことにあると考えられる(5)。9世紀後半より10世紀初頭にかけては、もっとも海進がすすんだ時期である。おそらく、標高5mのラインまで海が入り込んだものと推測されている。本遺跡から、せいぜい4kmのところまで海であった時期があったのだから、今と異なりかなり近い距離にあったと思われ、海水の運搬にはさして困難をきたさなかったのであろう。

農耕に従事しながら塩焼きをやっていた律令制下の庶民村落と、その生活の一端がうかがわれ甚だ興味深い資料を本遺跡は提示しているのである。

## (2) 赤焼土器について

赤焼土器については、その概念が自明のこととして使用されてきたが、ここでどのような土器を呼称しているかを明らかにし、その器種や変遷について若干の考察を加えてみたい。

東北各地の古代遺跡から、かなり多くこの種の土器の出土がみられる。赤焼土器は平安時代の土器で、成形技法は須恵器に類似して、坏などにおいてはロクロ水挽きにより糸切りの痕跡を残すが、焼成は酸化焙焼成で赤褐色や黄褐色を呈するものが多く、再調整は甕の胴下半部などを除いてはほとんど行われていない土器である。器種は坏がもっとも多いが、高台坏、皿、壺、埴、壺、燈明皿などがあり、稀に羽釜、埴などもある。主として日常什器として使われている。

これとほぼ同じ内容のものを「ろくろ土師器」、「須恵系土器」、「赤焼き土器」、「あかやき土器」、「酸化炭焼成須恵器」、「赤褐色土器」などと呼んできたが、それぞれ別個のものではないらしい。東北各県でも、福島では「ろくろ土師器」、宮城県教委の報告書では「赤焼土器」、多賀城跡調査研究所では「須恵系土器」、秋田城跡の報告書では「赤褐色土器」と呼んでおり、それぞれ区々である。

山形県内では、最近「赤焼土器」の用語がほぼ定着したが、これまでは報告書の執筆者によって「須恵系土器」、「ろくろ土師器」、「酸化炭焼成須恵器」、「赤色土器」、「あかやき土器」など、さまざまに使われてきた。「赤焼土器」なる名称を初めて使ったのは1972年の「城輪柵跡第3次発掘調査現地説明資料」(6)の中である。

かつて、これらの土器は土師器として扱われていた。氏家和典氏の「東北土師器の型式分類とその編年」(7)の中でも、もっとも新しい型式としてロクロ使用の土器を「表杉ノ入式」としたものの、かなりの部分は赤焼土器のようである。その後、氏家氏は陸奥国分寺出土の奈良・平安期の土器を再検討され、「表杉ノ入式」を10世紀前半を中心とする時期のものとし、それに後続する「国分寺式C類」を設定した(8)。これは12世紀後半を中心とするもので、おそらく赤焼土器の類がこれに当るものと思われる。

その後、桑原滋郎氏は、これらの土器が成形はもちろん焼成や胎土も土師器とは異なり、須恵器の技法上の流れをくむことから「須恵系土器」との名称を与え、11世紀から12世紀末までの土器であるとの見解を示された(9)。これまで土師器の仲間に入れられていたものを、土師器とは本質的にちがうものとして把握されたことについては多くの論議があった。また、中世陶器で須恵器の流れをくむ珠洲焼系の陶器について「須恵系」なる名

称を附したこともあり<sup>10</sup>、酸化焰焼成で赤褐色を呈する土器のイメージからもこの名称については必ずしも適切とは思われず、われわれは「赤焼土器」と呼称するようになったのである。

赤焼土器は色調や質からだけならば、環などの底部切り離しが篋切りによって行われた8世紀後半から9世紀前半、あるいはそれ以前にも焼成の関係で須恵器が赤褐色を呈することがあるが、それは赤焼土器の範疇に入らない。やはり須恵環の糸切りが一般化したと思われる9世紀後半に発生するようであり、それは意図的に日常什器として耐火度などの点で有用性をもつ、これらの土器が作られるようになった時期に上限を求めることができるであろう。その成立の要因については、やはり須恵器製作技術の影響が大きく作用していると思われる。

中世陶器に附随しても、酸化焰焼成による赤褐色の土器が小皿や燈明皿などにかなり多くみられるが、それは赤焼土器とは言わず赤焼土器の主体をなす環が消滅し、特徴的な甕や鍋もなくなる12世紀頃をその下限としたい。ほぼその初頭を除き、平安時代に盛行した土器で古代の終焉とともに姿を消していくのである。

赤焼土器の器種は環がもっとも多く、高台が付く場合もある。ある時期から小形の皿や高台付皿も現われる。それに長胴形甕よりもやや背の低い甕、鍋などより構成されるが、稀に壺、鉢などもある。主として酸化焰焼成による土器の、火熱に強い特性を生かした煮沸状態と供膳形態のものが多かったようである。つまり、日常の炊事用の什器が主流を占めている。

この土器の変遷を把握するため、編年試案を提示してみた(第51図)。たまたま今年度発掘調査を実施した八幡町茅針谷地<sup>11</sup>、酒田市岡B<sup>12</sup>、それに本遺跡がそれぞれ時期を異にするので典型的な器種を選んで編年を試みたが、決して完全なものではないので今後の検討が必要である。特に第Ⅲ期と第Ⅳ期の間には、もう一型式の設定が可能である。

編年表をみると、一般に時代が降るにつれて小型化する傾向がある。環においてみると第Ⅰ期のものは、口径13cm以上で高さも5～6cmのものが多い。第Ⅲ期や第Ⅳ期になると器高が5cm以下のものが多くなり、第Ⅳ期に至っては4cm以下で浅い環が出現する<sup>13</sup>。概して古いものほど法量が大である。第Ⅲ期には小形の皿や台付皿が非常に多いが、Ⅱ期からその傾向が出始める。Ⅱ期からⅢ期にかけては、高台付環や高台付皿が出現する。

甕は当初、長胴形甕の流れをくむ口縁部が「く」の字形に屈曲し、胴の長いタイプから屈曲しながら口唇が上方へ伸び内面蓋受けのような部分を形成し、胴部がわずかにふくらみながら底部に移る比較的高くない甕へ移行するようである。鍋は口縁部に時期的な推移が表われている<sup>14</sup>。何れにしても第Ⅲ期は赤焼土器の最盛期である。12世紀に入るや赤焼土器

は衰退をみせ、浅い皿状のものが多くなり燈明皿風の、いわゆる「かわらけ」があらわれる。その推移の流れは、以下の表によれば一層明瞭になるであろう。

遺跡名	須恵杯の底部 切りはなし	須恵器の 比率	赤焼土器の 比率	黒色土器の 比率	備考
関 B	篋切りが主	40.7%	54.7%	3.5%	
茅針谷地	回転糸切りが主	15.1%	78.8%	5.9%	
境 興 野	回転糸切りが主	19.4%	76.8%	3.6%	小形の皿、台付皿 が多くみられる。

つまり9世紀後半では須恵器と赤焼土器がほぼ半々であるのに対し、10世紀以降75%を越える比率で赤焼土器の占める比重が大きくなるのである。

赤焼土器は土師器に比して、やや硬度が高いこと、黒斑が見られないことなどからして上屋のある竈で焼成されたとの推測がなされてきた。そして、岩手県瀬谷子遺跡の焼けた土壌などがその可能性あるものとしてあげられている<sup>45)</sup>。茅針谷地や八森遺跡などからも径1.5m前後、深さ30~50cmの、内部が焼けて赤焼土器破片が貼りついている土壌が検出されたが、これらも竈の可能性あるものといえるだろう。また、須恵器を焼成する「突窓」を用いた場合もあったと思われる。後者の場合は赤褐色を呈し、器壁が硬く焼き締まり胎土も密である。同じ赤焼土器も、竈によって焼き締まりにちがいがあったようである。

燃料の節減がはかられ、わりと簡便につくられ、それに火熱に強いという利点をもつ赤焼土器は平安時代の東北地方において土器の中で主流を占めた。それは西日本における瓦器、中部地方における山茶碗の流行に対応したものであったろう。須恵器が貯蔵形態、供膳形態の一部を占めてそれぞれ機能分担して用いられるが、赤焼土器の占める比重が時代が降るとともに増していくこと背景には、律令体制の衰亡という歴史的事象があったのではないかと思われる。

## 【註】

- (1) 山形県教育委員会 「茅針谷地遺跡」 「山形県埋蔵文化財調査報告書 第49集」 1981年。
- (2) 山形県教育委員会 「関B遺跡」 「山形県埋蔵文化財調査報告書 第47集」 1981年。

山形県教育委員会 「北田遺跡」「山形県埋蔵文化財調査報告書 第48集」  
1981年。

- (3) 川崎利夫 「城輪柵周辺の諸遺跡——最近の発掘調査から——」 「羽陽文化」112号  
1980年。
- (4) 新野直吉 「水駅ならざる水駅」 「歴史」28号 1964年。左の論文では平田町付近  
を擬定しているが、飛鳥・砂越の方がより有力に思われる。
- (5) 佐藤禎宏 「仁和三年条の国府移転に関する覚書」 「庄内考古学」第16号 1979年。
- (6) 酒田市教育委員会 「史跡城輪柵跡第3次発掘調査現地説明会資料」 1972年。
- (7) 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」 「歴史」14号 1957年。
- (8) 氏家和典 「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって——奈良・平安期土師器の諸問  
題——」 「山形県の歴史と考古——柏倉亮吉氏還暦記念論文集——」所収  
1968年。
- (9) 工藤雅樹・桑原滋郎 「東北地方における古代土器生産の展開」 「考古学雑誌」  
第57巻3号 1972年。  
岡田茂弘・桑原滋郎 「多賀城周辺における古代環形土器の変遷」 「研究紀要Ⅰ」  
宮城県多賀城跡調査研究所 1974年3月。  
桑原滋郎 「須恵系土器について」 「東北考古学の諸問題」所収 1976年。
- (10) 川崎利夫 「羽前水沢附近における中世火葬墓と須恵系蔵骨器の数例——中世墳墓  
の諸形態——」 「山形考古」6 1960年。  
川崎利夫 「辺境地における古墳の終末と火葬墓の展開」 「山形県の歴史と考古——  
柏倉亮吉氏還暦記念論文集——」所収 1968年。
- (11) 註(1)に同じ。
- (12) 註(2)「関B遺跡」。
- (13) 佐藤庄一 「山形県における平安時代の土器様相」 「庄内考古学」第16号 1979年。  
編年表の第Ⅳ期については、本論文の平形遺跡G地点4号溝跡出土の資料によった。  
山形県教育委員会 「平形遺跡・周辺遺跡」 「山形県埋蔵文化財調査報告書 第26  
集」1980年。
- (14) 安部 實 「境典野遺跡出土の場について」 「庄内考古学」第17号 1980年。
- (15) 桑原滋郎 「須恵系土器について」 「東北考古学の諸問題」所収 1976年。  
小笠原好彦 「東北における平安時代の土器についての二・三の問題」 「東北考古  
学の諸問題」所収 1976年。

器種 時期 遺跡名・推定年代		坏	皿	甕	埴
第 I 期	関 B 遺跡 9 世紀後半				
第 II 期	茅針谷地遺跡 10 世紀前半				
第 III 期	境典野遺跡 10 世紀後半 ~11 世紀前半				
第 IV 期	平形遺跡 G 地点 12 世紀前半				

第51図 赤焼土器編年表(試案)

图

版

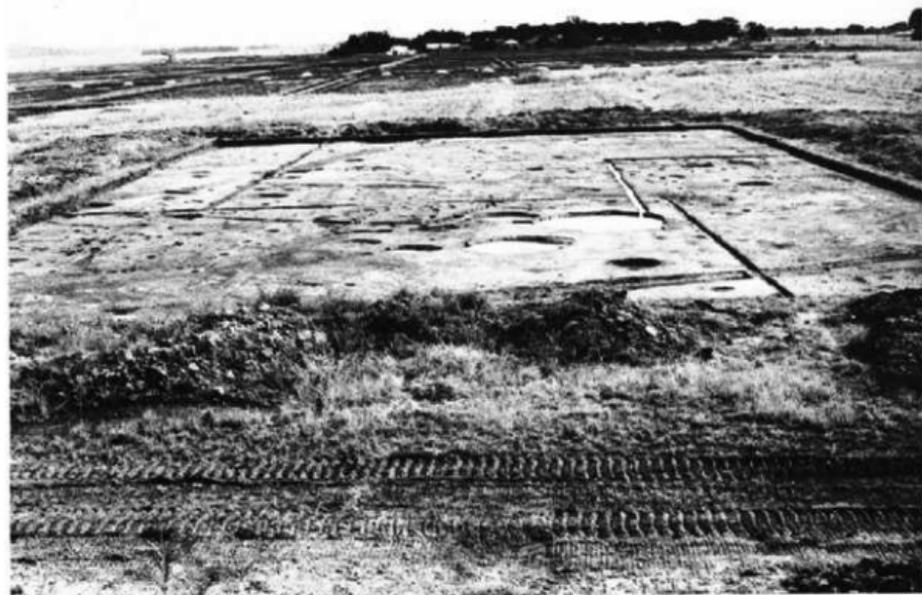


图版 1

境興野遺跡周辺航空写真(1966年) 酒田市教育委員会提供



△ 遺跡遠景 (▼印・東より)



△ 精査区近景 (北より)

図版 3



精査区西側 ▷  
(北より)



SD1・25溝跡 ▷  
(東より)



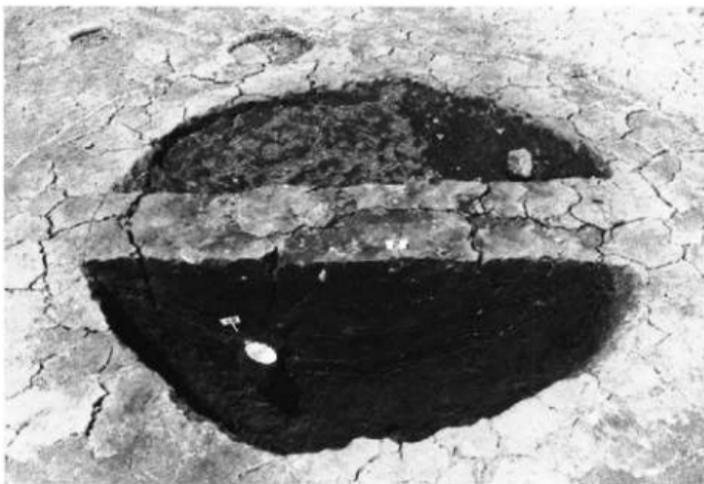
SD1・25溝跡 ▷  
(東より)

図版 4

SK 2土壌跡検出状況 ▷  
(北より)



SK 2土壌跡埋積土状況 ▷  
(南より)



SK 3土壌跡検出状況 ▷  
(北より)



図版 5

SK 3土壇跡  
遺物出土状況  
(南より)



同上  
(南西より)



SK 3土壇跡  
埋積土状況・南辺  
(東より)



SK 3土墳跡  
埋積土状況・北辺  
(東より)



SK 7土墳跡 (東より)



同上 (北より)



図版 7



SK 8土坑跡 ▶  
(西より)



同 上 ▶  
(北より)



SK 26土坑跡 ▶  
検出状況  
(北より)

図版 8

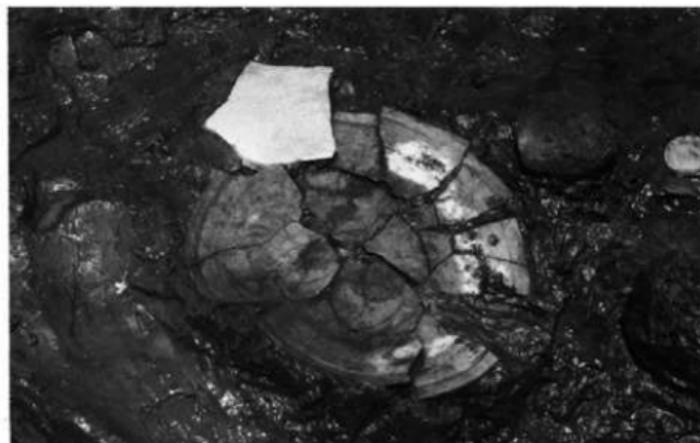
SK26土壇跡  
埋積土状況 (南より)



同 上 (南西より)

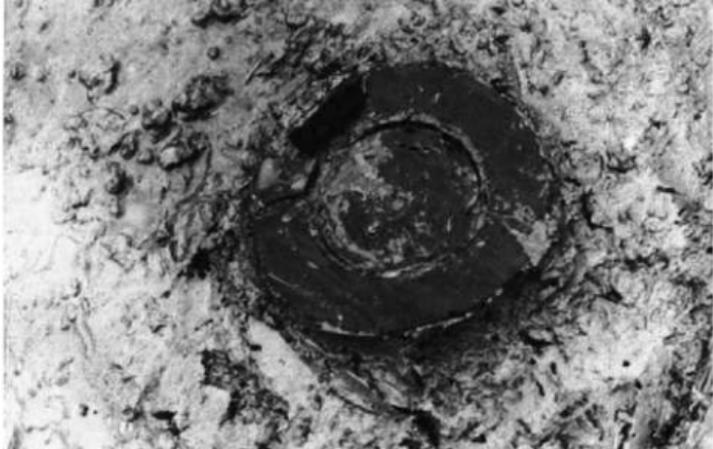


SK26土壇跡  
赤焼土器塼出土状況 RP90  
(南より)

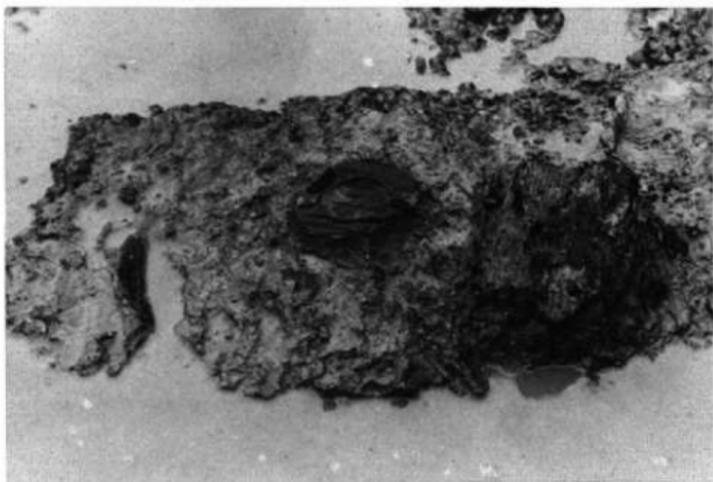


図版 9

SK 26土壌跡  
漆器出土状況  
(南より)



SK 26土壌跡  
漆器・木製品出  
土状況 (南より)

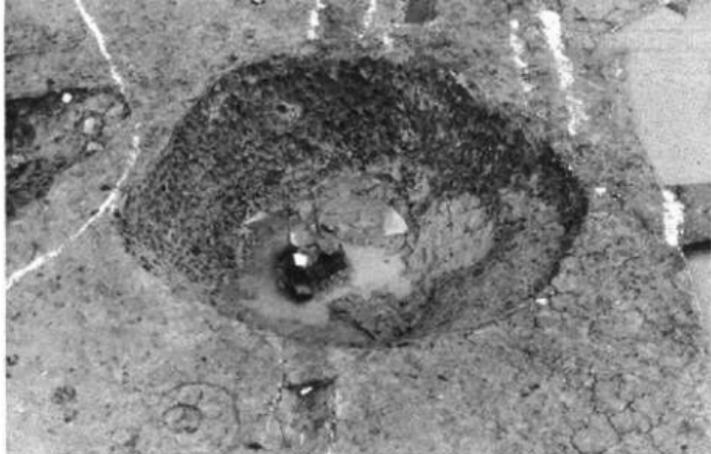


SK 27土壌跡  
(南より)



図版 10

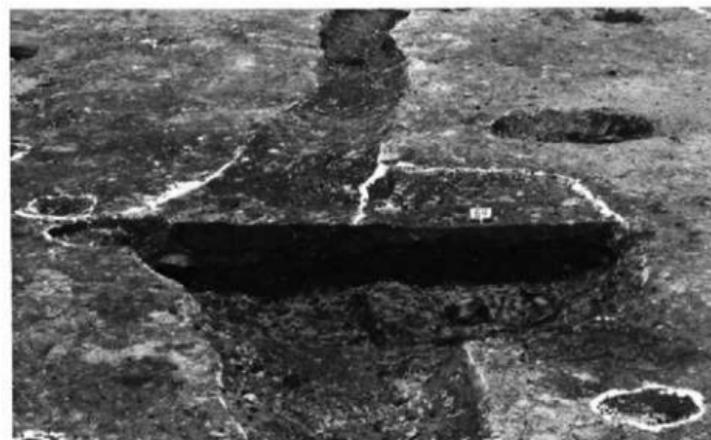
SK27土痕跡 (南より) ▷



SK63土痕跡 (南より) ▷



SK64土痕跡 (東より) ▷



図版 11

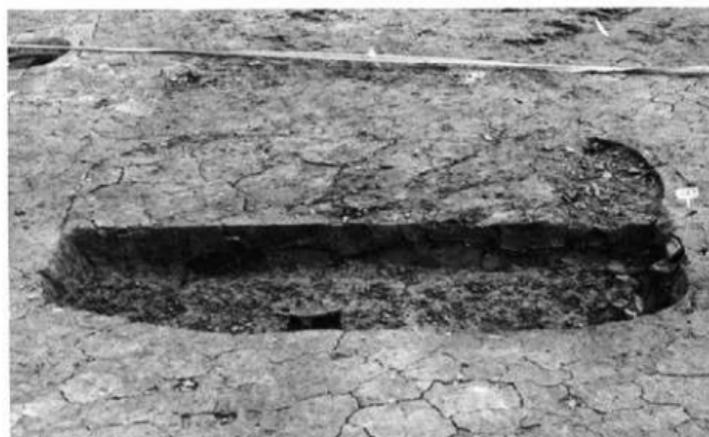
SK 64土壇跡  
(南より)



SD 153溝跡  
(南西より)



SK 143土壇跡  
(南より)





SK143土壇跡 (南より) ▷



SK145土壇跡 (南より) ▷



同 上 (北より) ▷

図版 13

SK146・147・  
148土竈跡  
(南東より)



SK147土竈跡  
(南より)



SK148土竈跡  
(南より)





SK150土坑跡 (南より) ▷



SK151土坑跡 (東より) ▷



SK152土坑跡 (東より) ▷

図版 15

SK152土壇跡  
▷  
(南より)



SK153土壇跡  
▷  
(南より)



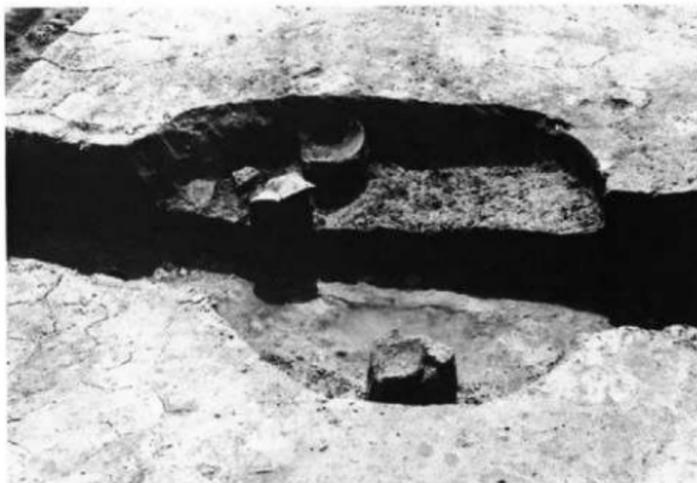
SK154土壇跡  
▷  
(西より)



図版 16



SK154土坑跡（西より）▷



SK155土坑跡（東より）▷

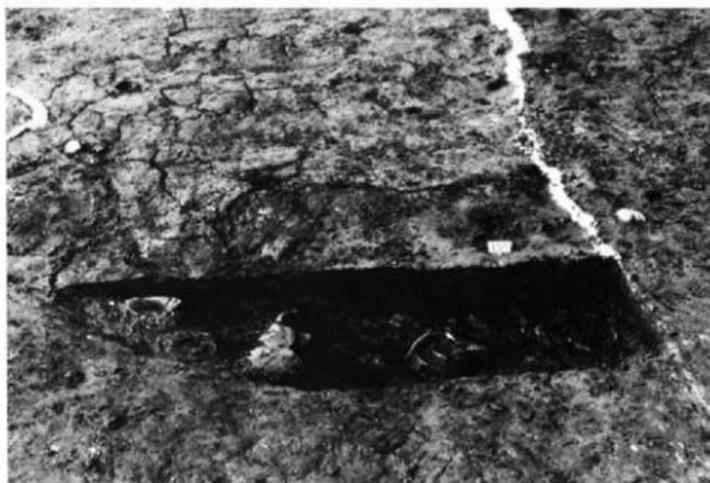


SK158土坑跡（南西より）▷

図版 17



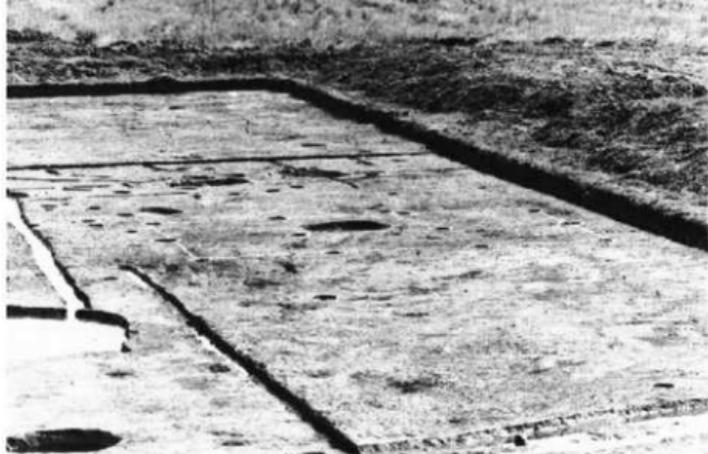
SK161土坑跡  
(北東より) ▶



SK159土坑跡  
(南より) ▶



同上 ▶



SB110建物跡（北東より）▷



SB58建物跡（北西より）▷



調査風景 ▷



県民参加の発掘 (1980年8月5日)



52



87



(内)

114



119



140



(外)



141



142

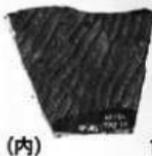


(内)



148

(外)



(内)

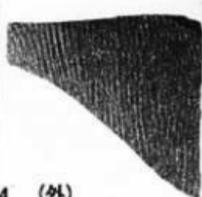


143

(外)



(内) 144



(外)



154



156



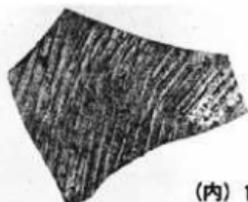
157



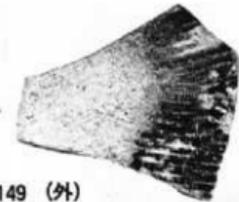
(内)

150

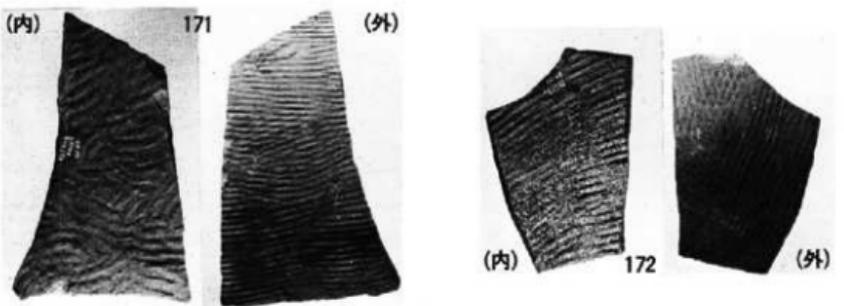
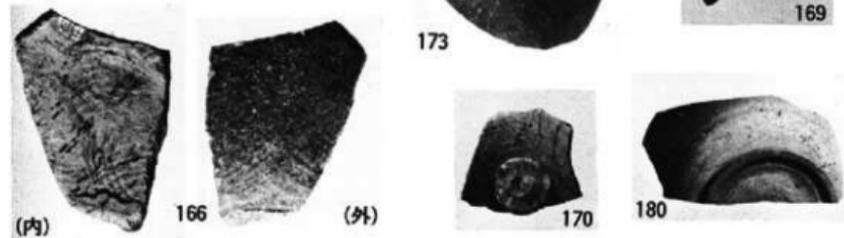
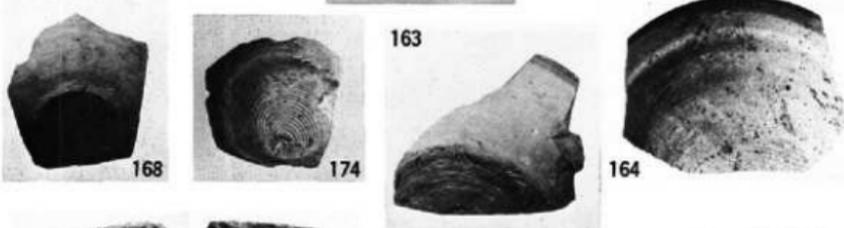
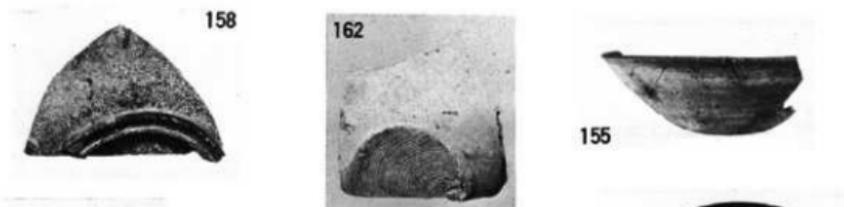
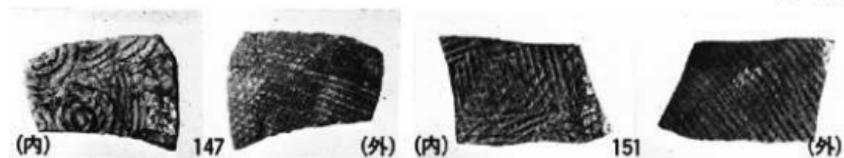
(外)

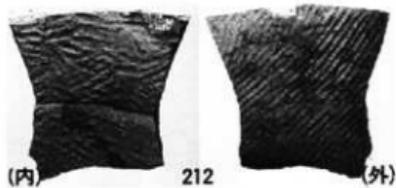
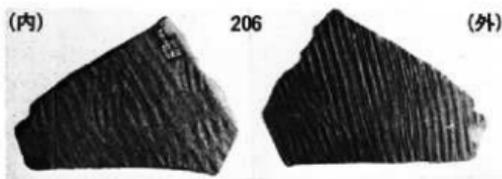
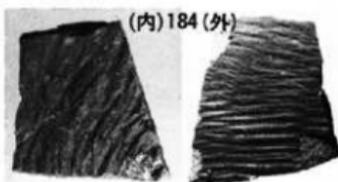
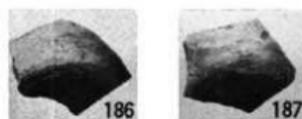
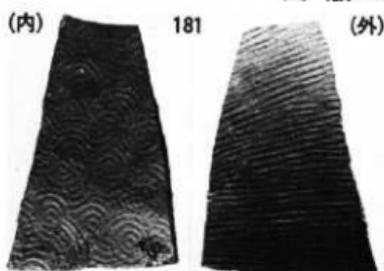
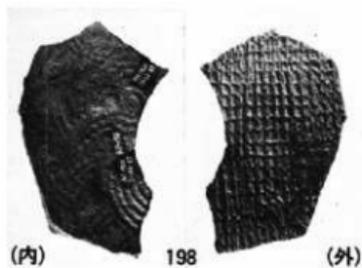


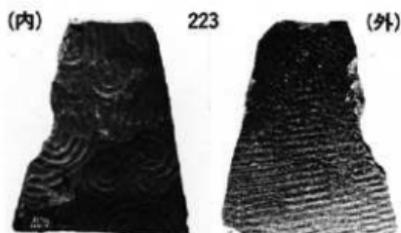
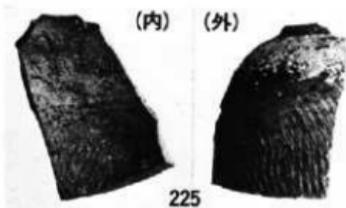
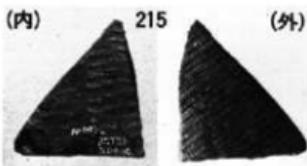
(内)

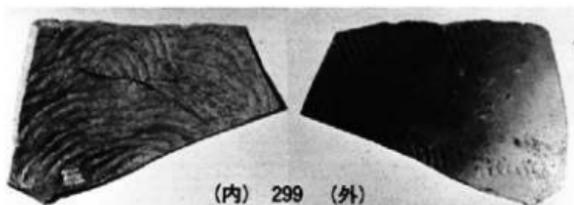
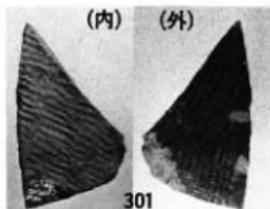
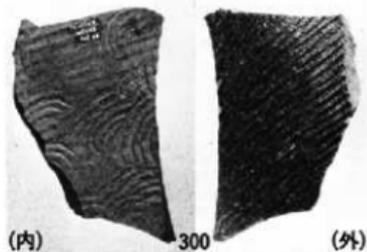
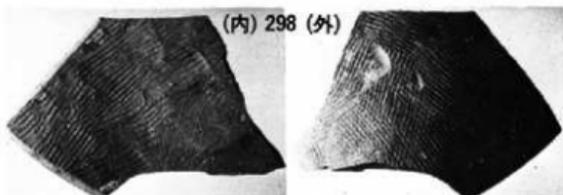
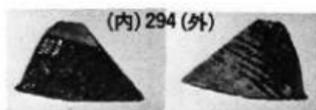
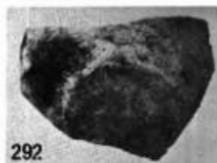
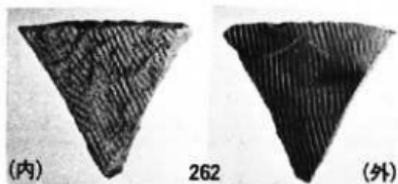


(外)











3



4



5



6



8



9



11



12



13



15



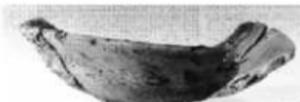
16



17



18



19



21



22



23



24



25



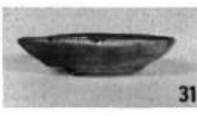
26



29



30



31



32



33



34



35



37



39



43



45



46



47



48



49



51



53



54



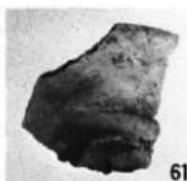
55



56



58



61



62



66



67



68



70



71



72



76



77



78



79



80



81



83



86



96



99



101



103



104



105



107



108



109



110



111



112



113



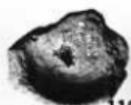
115



116



117



118



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



133



134



135



136



137



138



139



152



153



159



175



176



(外)



161

(内)

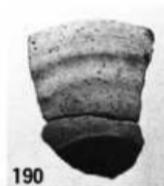
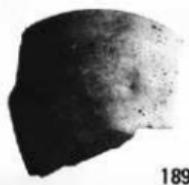
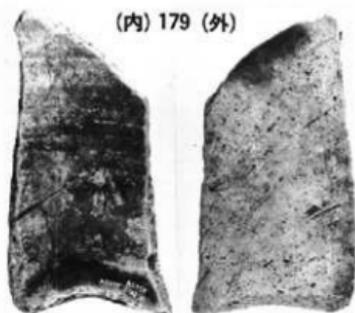


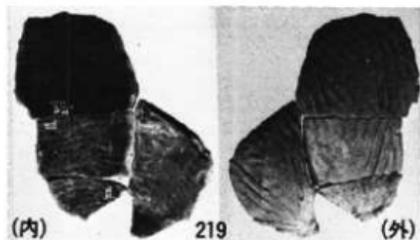
(内)



167

(外)







252



264



265



266



267



268



269



270



271



272



273



274



275



276



277



278



279



280



281



282



283



284



285



286



287



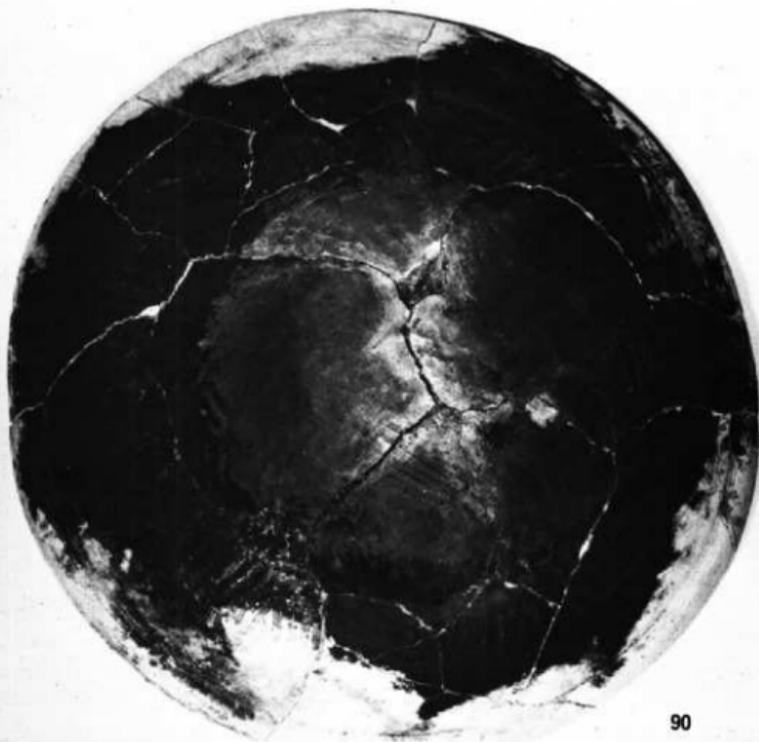
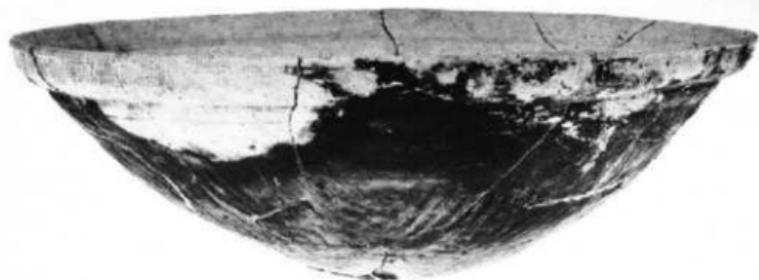
288



289

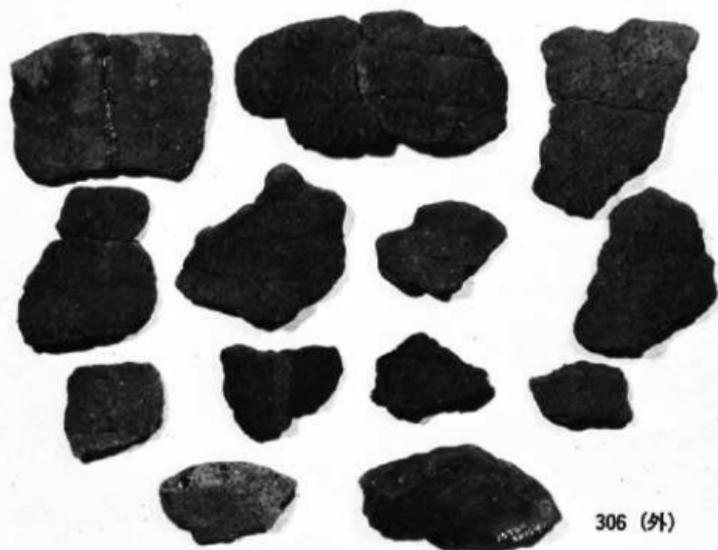


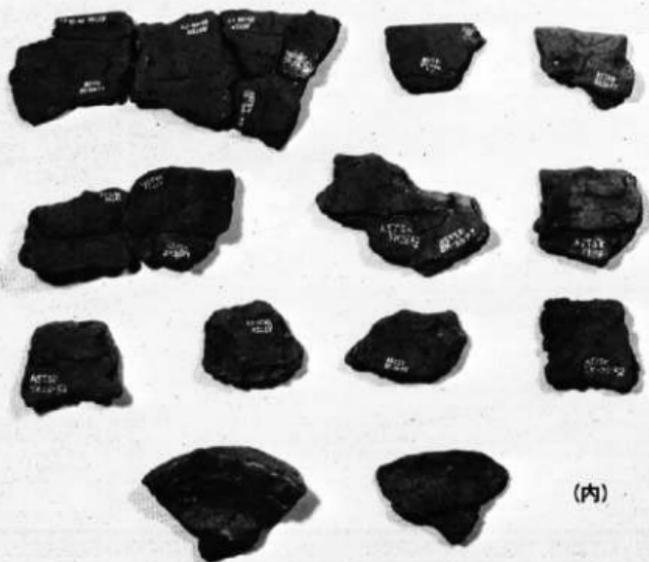
308

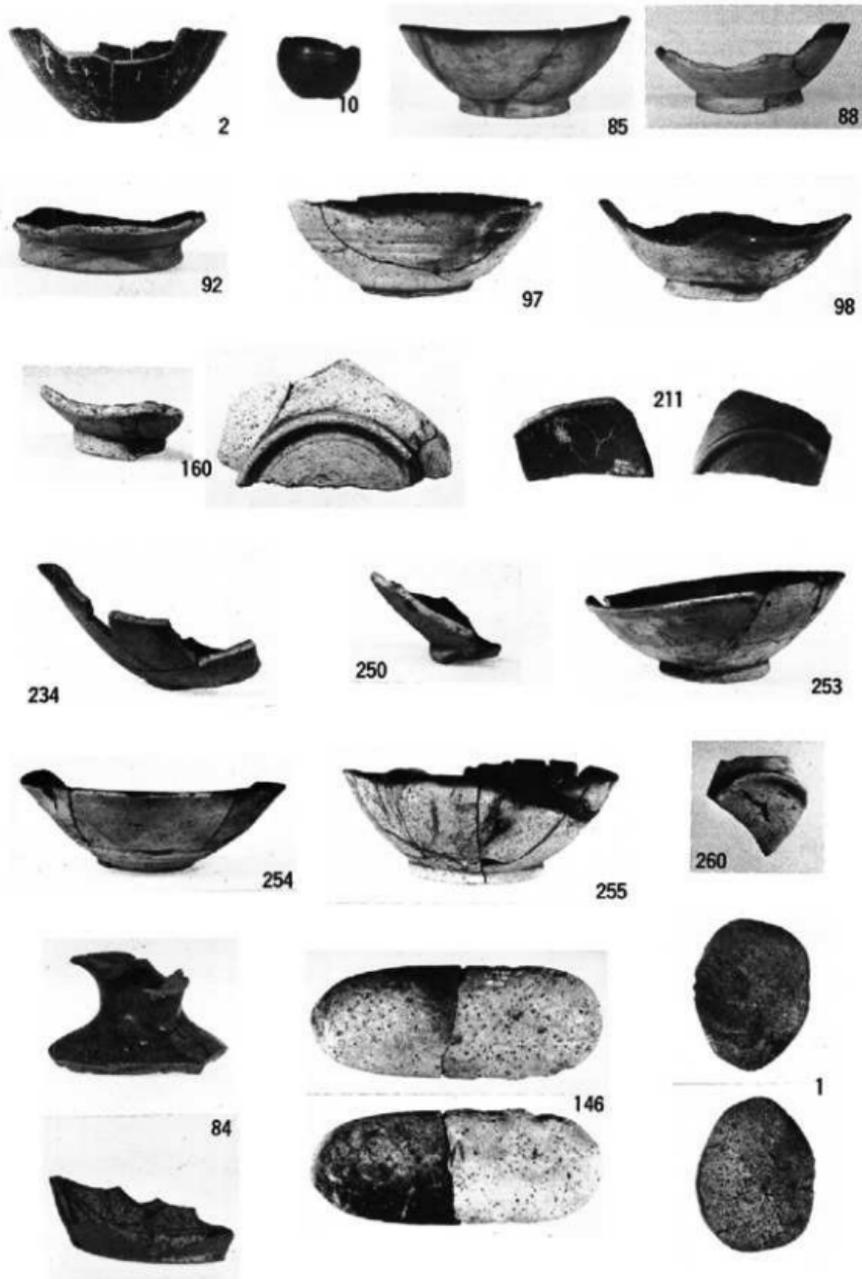


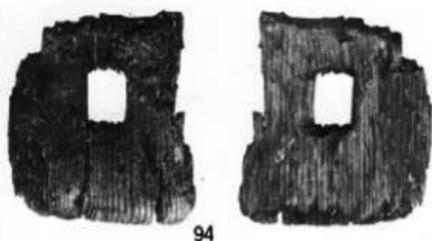
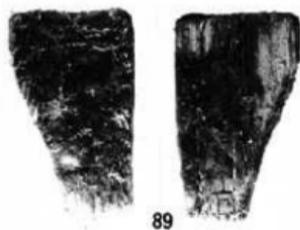
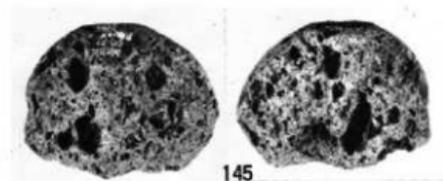
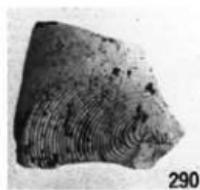
90

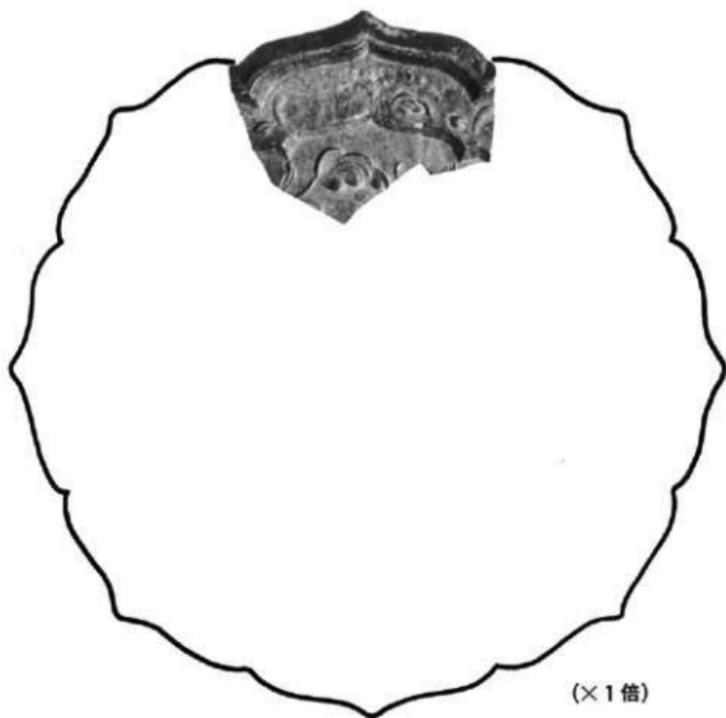
赤焼土器 埴











100

瑞花鳳凰八稜鏡

---

山形県埋蔵文化財調査報告書 第46集

504  
境 興 野 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

昭和56年3月23日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社

鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080 内

---